空間・社会・地理思想 第2号 pp.54～78、1997
Space, Society and Geographical Thought, No.2

空間と時間の間で
—地理学的想像力に関する省察[1)]—

デイヴィド・ハーヴェイ*
(堤　研二**　訳)

David HARVEY
Between space and time: Reflections on the geographical imagination
Annals of the Association of American Geographers, 80(3), 1990, pp. 418-434.
© 1997 by Blackwell Publishers

要約　空間と時間に関する諸概念 concept は社会的に構築されるものの、それらは、社会的再生産過程において、客体的な事実の全的な力をもって作用し、重大な役割を果たす。たとえ、社会変動が外部から押し付けられたもの（帝国主義者の支配におけるように）であれ、あるいは内部で発生したもの（環境主義者と意志決定に関する経済的標準との間のコンフリクトにおけるように）であれ、空間と時間に関する考え方 conception は、それゆえ、必然的に社会変動の過程の不可分の一部として対抗関係のもとにおかれる。空間と時間の概念に関するある種の歴史地理学的研究は、これらの概念の社会的構成のルーツが生産様式とその特徴的な社会組織の中にある、ということを示唆している。とりわけ、強力な技術工学的変化と急速な経済成長・発展とに特徴づけられた資本主義的生産様式の革命的な特色は、空間と時間とに関する社会的考え方における強力な革命と密接に関連してきた。「時間による空間の絶滅」と、資本の回転期間の一般的スピード・アップおよび加速とを行うことを意味するこれらの諸革命の含意は、文化と政治学の領野、美学理論、そして最終的には、現代の社会生活における地理学的想像力の役割を再考するための一つの問題および一つの刺激として、地理学の学問分野で切実に感じられるようになるのである。

キーワード：美学、資本主義、地理学、地政学、史的唯物論、場所、社会変動、社会的再生産、社会空間、社会理論、社会時間

私が考察したいと思う問題は、空間と時間とに関する一種の歴史地理学の構築である。そのことは、空間と時間とに関する諸概念 concept への二重の作用のように思えるし、実際そうなのであるが、この考え方は、最初に理論をある程度深めておくことを必要とする。そこで、私は日常生活に関する歴史地理と自らを地理学者と称する人々の社会的実践との関連においてこの考え方の含意を探究してみようと思う。

* ジョンズ・ホプキンズ大学　** 島根大学法文学部
なお、翻訳文中の（ ）内は著者による、〔 〕は訳者による注釈・補足である。また、「解題：ハーヴェイの空間－時間論」（【あとがき】【付記】を含む）、「ハーヴェイ著作一覧」、「他者によるハーヴェイ関連の文献」が訳者によって末尾に付されている。

社会生活の諸空間と諸時間

デュルケムは『宗教生活の原初形態』（Durkheim, 1915）の中で、空間と時間とが社会的構成物である、ということを指摘している。ハロウェル（Hallowell, 1955）、レヴィーストロース（Lévi-Strauss, 1963）、ホール（Hall, 1966）、それにもっと最近ではブルデュー（Bourdieu, 1977）、ムーア（Moore, 1986）といった人類学者たちの著作が、この観点を確認している。すなわち、異なる社会が空間と時間とに関する質的に異なる考え方 conception を生産するのである（Tuan, 1977 をもみよ）。この人類学的な根拠を解釈するに当たり、私は二つの項目に光を当てたい。

第一に、空間と時間との社会的な定義は、すべての

諸個人と諸制度とが必然的に対応する、客体的事実の全的な力をもって作用する。例えば、現代の諸社会において、たとえ時計時間が社会的構成物ではあっても、それを日常生活における一客体的事実として受容している。それは、あらゆる個人の影響からの外側にあって、我々を繰り返し自分たちの生活の組織化へと向かわせ、そしてそれに関してあらゆる様式の社会的行動と主観的感覚を我々が評価・判断するような、共有された基準を提供するのである。我々がそれに適合しようとしない時でさえ、我々は自分が適合しようとしていないのが何に対してなのかをよく知っているのである。

第二に、客体的な空間と時間の諸定義は、社会的再生産の過程に深く包含されている。ブルデュー（Bourdieu, 1977）は、例えば、北アフリカのカビール人〔アルジェリア、チュニジアに住むベルベル人の一部族〕の事例において、いかに時間的および空間的な組織物（カレンダー、家屋内部の仕切りなど）が、異なる場所と時間に人々と諸行動を割り当てることを通じて、社会秩序を構成することに役立っているか、を示している。この集団は、空間的および時間的な組織のある特殊な様式にしたがって、その階層、ジェンダーの役割、そして分業を秩序づけている。例えば、カビールの社会における女性の役割は、特別の諸時間において占有される諸空間との関連において決められている。空間と時間に関するある独特の表象方法は、ひるがえって社会秩序を保証する空間的および時間的実践を導き出す。

この種の実践は、先進資本主義社会においても、よそ事ではない。まず第一に、時間と空間とは常に個体化 individuation と社会的分化との双方に関する原初的な手段である。行政的・法的・財政的な諸実体としての空間的単位の定義は、社会生活の組織に幅広いインパクトを有する社会的行為の場を決定する。実際、地理的諸実体に名を与えるというまさしくその行為は、それらに対する権力、なかでもとりわけ場所、そこでの住人たち、そして社会的諸機能が現出するありさまに対する権力を含意する。エドワード・サイード（Edward Said, 1978）が、彼のオリエンタリズムに関する研究の中で見事に示しているように、色とりどりの人々のアイデンティティが、よそ者たちによって名前の上に課せられたコノテーション〔含蓄〕とアソシエーション〔連想〕を通じて、崩壊させられ、形成され、操られうる。場所とアイデンティティに関するそのような表象の意味と様式についてのイデオロギー的闘争は、たくさんある。しかしアイデンティフィケーションの単なる行為を超えて、社会空間的構造の内部に場所を割り当てることは、社会秩序内部での異なった役割、行為能力、そして権力へのアクセスを指し示すことになる。さまざまな種類の社会的活動を「いつ」、「どこで」やるか、それらを「いつ」、「どこで」関連づけるか、ということは、明白な社会的メッセージを伝える。例えば、我々はいまだに「すべてのものに時間と場所」があるという考え方を子供たちに教えるし、ある意味のレベルでは我々のすべてが、我々のぶんざい place が何であるかを知っている（我々がそれを心地よいものであると感じるか否かは別として）。さらに、我々はすべて、「ある地位 place に据えられる」ことの意味を知っているし、社会的にと同様に物理的にその場所がどうあるべきかを問うことは、社会秩序における基本的なものを問うことであることをも知っている。座り込み・街路でのデモ・バスチーユもしくはテヘランのアメリカ大使館の門の襲撃・ベルリンの壁の打ち壊し、そして、工場もしくは大学の管理棟ビルの占拠は、すべて既存の社会秩序に対する攻撃の記号である。

たとえ空間と時間とに関する諸概念が社会的再生産において作用する正確な様式は微妙でニュアンスを含み、それをまさしく読みとるためにあらん限り洗練された調査装備が要求されるとしても、これらの〔前述の〕諸現象の充分な諸説明以上に、それらの一般性についてさらに証明する必要はないだろう。しかし、次のような命題を支持するには充分に強固な証拠がある。すなわち、各々の社会構成体は、物質的および社会的再生産に関するそれ自体の要求と目的に充分なまでの空間と時間とに関する客体的な考え方を構築し、それらの考え方にしたがってその物質的実践を組織化する。

しかし、諸社会は、変化し、成長し、それらは内部から変容させられ、外部からの圧力と影響とに適応する。空間と時間とに関する客体的な諸々の考え方は、社会的再生産の新しい物質的実践に順応するために変わらなければならない。時間と空間とに関する公的で客体的な諸々の考え方におけるそのような変移は、いかにして達成されるのであろうか？あるいくつかの場

合には、その解答は簡単に与えられる。空間と時間とに関する新しい諸概念は、征服、帝国の拡大、ないしは新植民地主義的支配を通じた主要な権力によって押し付けられてきた impose。例えば、北米におけるヨーロッパ人の定住は、時間と空間とに関するまったく異質な諸々の考え方を平原インディアンたちに押し付けたし、そうすることにおいて、これらの人々の再生産が行われ得たとした場合に、それを入れる社会的フレームワークを永久に変えることになった。ミッチェル（Mitchell, 1988）が示すように、家屋・教室・村・兵営の中、そしてカイロの都市それ自体の中を通じてさえ為された数学的に合理的な空間的秩序の押し付けは、エジプトをヨーロッパ流資本主義の規律の枠に従わせるための 19 世紀末のプロジェクトの中心であった。そのような押し付けが、必ずしも歓迎されたわけではない。資本主義的社会諸関係の拡大は、産業組織に含蓄された時間原理の共通の網へ、そして、数学的に厳密な関係において明示された領域および土地の諸権利の分割を尊重するようそうでない異なる人々を社会化するために、しばしば激しい闘争をともなった（Sack, 1986 をみよ）。そのような押し付けに対する後衛戦がたくさんある一方で、それにもかかわらず、現代世界の大部分を通じて存在する時間と空間とに関する公的な諸定義が、資本主義発展の道筋において押し付けられてきたのは真実である。

時間と空間とに関する公的な意味に、内部から対抗がなされる時、よりいっそう興味深い諸問題が生じる。現代社会におけるそのような対抗は、部分的には時計の権威と地籍図の暴虐とに対する個人的および主体的抵抗から生じる。モダニストとポストモダニストの文学と絵画は、空間と時間とに関する単純な数学的および物質的尺度に対する反乱の記号で満ちあふれており、一方、心理学者たちと社会学者たちは、彼らの調査を通じて、支配的な公的実践から相当にはずれ出た個人的および社会的諸表象の、高度に複雑でしばしば混乱した世界を暴き出してきた。個人的な空間と時間は、自動的にそれらに関する支配的な公的な意味と一致するものではない。また、タマラ・ハレーヴン（Hareven, 1982）が示しているように、労働力の非熟練化および再熟練化に対する「産業時間」の圧力とサイクル的な雇用のパターンに「家庭時間」を統合し、また、「家庭時間」が「産業時間」を相殺するような複雑な方式が存在している。もっと重大なことには、時間と空間とに関する諸々の考え方における階級・ジェンダー・文化・宗教、そして政治的な分化は、しばしば社会的コンフリクトの闘技場と化している。空間と時間との適正で客体的な特性も、あらゆるものにとっての正しい時間と空間とは何なのかということの新しい定義も、そのような闘争から生じうる。

そのようなコンフリクトの２、３の例をあげておくのがよいであろう。最初の例は『資本論』の「労働日」に関する章に由来しており、そこでマルクス（Marx, 1967, pp.233-235）は、資本家と労働者の間の架空の会話を設けている〔『資本論』第３篇第８章「労働日」；岩波文庫版では第２巻の 93～216 頁〕。公正な一労働日の労働は、労働者が翌日になって労働に戻るのに充分な体力を回復するのに、労働者がどのくらい多くの時間を必要とするのかに関連して計られ、また、適正な一労働日の賃銀は一日ごとの再生産コストをカバーするのに必要とされる貨幣によって与えられるということを、前者〔資本家〕が主張する。〔これに対して〕そのような計算は、絶え間ない労役による労働者の生命の消耗を無視しており、公正な一労働日の労働と賃銀とは、労働する生涯期間にわたって計算された場合、まったく異なってくる、と労働者は回答している。マルクスが議論しているが、市場交換の諸法則の立場からみれば、この双方はともに正しい。しかし、異なった階級の視点からは、社会的計算のための異なった時間地平が要求される。マルクスが議論するに、そのような平等の権利〔双方がともに正しいという状態〕の間では、力が勝敗を決定する。

「父の時間」のジェンダー化が二つ目の事例となる。労働時間を、直接他人に労働力を販売するに際して取り上げられた時間としてのみ定義する奇妙な習慣を通じて、ジェンダーの役割に応じて時間がまったく異なって解釈されるようになっただけではない。フォアマン（Forman, 1989）が指摘するように、女性の世界を自然の反復的時間へと変形 reduction したことが、女性をして「男性が定義した時間世界の中でのよそ者」たらしめていた家父長制の歴史の直線的な時間から、女性を排除する効果を持っていた。この場合の闘争とは、男性による時間への支配が、自然と「自然的存在」としての女性への支配と類似の、神話、イコノグラフィー、そして儀礼といった伝統的な世界に対して挑戦す

ることである。例えば、ブレイク Blake〔イギリスの画家・詩人の William Blake(1757-1827)のことか？〕が「時間と空間とは実在的存在である。時間は男であり、空間は女であって、彼女の男性的な部分が死である」（Forman, p. 4 より引用）ということを主張した時、今日に至るまで鳴り響いている広く認められたアレゴリー的な仮定を、彼ははっきりと表現していたのである。出生の時間（およびそれが意味するすべてのもの）を、死と歴史に関する男性的関心事に関連づけることは不可能であり、フォアマンの観点からはこれは、男性と女性の間のいっそう深い心理学的な戦場の一つとなっている。

第三の事例は、最適な鉱業資源開発についての時間地平 horizon に関する経済学者と地質学者との間の会話から引き出される。前者は、適正な時間地平は金利と市場価格とによって設定されると思っているが、時間に関するとても異なった考え方を有している地質学者は、あらゆる世代がその分割できうる資源の分け前を次世代へ残すことがすべての世代の義務であると論ずる。この議論を解決する論理的な方法はない。それもまた、主たる力によって決着がつけられる。資本主義下で普及する支配的な市場諸制度は、経済計算のあらゆる闘技場において（ローンで住宅を購入することを含む）、金利によって時間地平を固定する。それがこの物語の結末である。

ある決着の効果が作用すると思われる時間地平だけから引き出される社会的コンフリクトの潜在的可能性がここでアイデンティファイされよう。「長期的にみれば、我々はすべて死ぬ」ということ、そして短い期間こそ、唯一、経済的および政治的決定を操作可能にする理に適った時間地平であるという、ケインズ流の公理を経済学者たちはしばしば受容する一方、環境主義者たちは、あらゆる形の生命（人間のそれを含む）が保護されるべき無限の時間地平をかけて、責任が持たれるべきであると主張する。時間の意味における対極のものは明らかである。たとえピグー Pigou 流の経済学におけるように、より長い時間地平が経済的計算に導入される時であっても、効果的な手段は、生態学的、宗教的、もしくは社会的計算よりも、むしろ経済学的なそれによって設定される割引率を通じたものである（例えば、すべての環境的インパクトは貨幣化する〔貨幣に換算する〕ことができるということと、割引率は長期間の環境的インパクトを説明するための完璧で充分な手段であるということとを主張している、ピアース Pearce、マーカンディア Markandya 、そしてバルビエール Barbier による、『*Blueprint for a Green Economy*』〔緑の経済のための青写真〕に関するレポート(1989)をみよ）。発展と変化の総体的な政治的・経済的軌跡は、我々が社会的実践においてどのような客体的定義を採用するかにかかっている。もしもその実践が資本主義的であれば、その時間地平は、環境主義者がかたくなに守っているそれと同じではあり得ない。

空間的な諸利用法と諸定義も、同様に実践的および概念的な領域において対抗の場となっている。ここでも、環境主義者たちは、ローカルな諸活動の、地球温暖化・酸性雨の生成、そして地球規模での資源基盤の略奪的な利用パターンへの流出 spillover 効果〔ローカルな諸活動の影響が進展・伝播してボーダレス的にグローバルな規模にまで浸透・到達・連係する効果〕を示しつつ、社会的行為の空間的領域についての、極めて幅広い考え方を持って活動している。そのような空間的な考え方は地価と金利によって設定される、ある特定の場所でのある時間地平にわたる地代を最大化する目的でなされる意思決定とコンフリクトを起こす。環境保護運動を識別するもの（そして多くの点でそれをとても特殊で興味深いものにしているもの）は、それが社会的再生産と組織の諸問題について生起させたところの、まさしく時間と空間とに関する考え方にほかならない。

空間と時間の意味と社会的定義をめぐるそのように深遠な闘争に直接的にたどりつくことは、まれにしかない。それらは、通常、特定の諸空間と諸時間の領有と支配をめぐる、よりいっそう単純なコンフリクトから現出する。例えば、1871 年にパリ・コミューン参加者たちがヴァンドーム広場の記念塔を破壊するために、パリ革命国民防衛軍〔革命時のパリの防衛組織〕を組織化するという緊急の用件をなぜやすやすとそっちのけにしたのか、私は理解するのに何年もかかった。その記念塔は、彼らを長期間支配し続けた相容れない権威の憎むべきシンボルであった。オスマン Haussmann による大通りの建設と都市中心部から労働者階級を追い出すことによって多くの分断された住民人口を「彼らの場所〔彼らにふさわしいと決めつけら

れた場所〕に」住まわせた、都市の空間的組織のシンボルがその記念塔であった。オスマンは、空間に関するまったく新しい考え方、つまり、資本主義的（とりわけ金融・財政的）諸価値にもとづいた新しい社会秩序にふさわしい考え方を都市の組織の中へ織り込んだ。1871 年の革命で企てられた、あるいはコミューン参加者たちが感じていた社会諸関係と日常生活との変容は、これまでとは異なる非階層的イメージの中でパリの内部空間を再構築する必要性を有していた。ヴァンドームの記念塔を引き倒すといった公の見世物が、コミューン参加者たちの力の、その都市に対する自己主張における触媒的動機となったという、その衝撃は極めて強力であった（Ross, 1988）。コンミューン参加者たちは、彼らが極めて無遠慮に排除されてきた空間を再占拠することによってのみならず、非階層的でコミューン的社会のイメージの中で、都市空間それ自体の客体的な社会的性質を再形成しようとする試みによっても、代わり得る〔新しい〕社会秩序を建設しようとした。コミューンについて想定された罪深さに対する罪滅ぼしとしてモンマルトルの丘の上にサクレクール寺院のバシリカ聖堂が建設されたのと同様に、その記念塔の次代の再建は、多分に一つの反動のシグナルであった（Harvey, 1985 をみよ）。

1989 年のボルティモアにおけるアメリカ地理学者協会の年次大会は、同様に、18 年間ほどその都市の住民である私にとっては、相容れない領域で開催された。現在のインナー・ハーバー再開発のばか騒ぎの仮面は、この空間に関わる闘争の長い歴史を覆い隠している。1960 年代初期に始まった都市のリニューアルは、不動産開発業者と金融機関によってリードされたが、彼らは戦略上重要ではあるが衰退しているとみなしていた都市中心を再び植民地化しようと考えたのであった。しかし、反戦デモ、反体制的行事、さらには主として貧困化したアフリカ系アメリカ人による市街での暴動という、投資者の信頼を最もくじいてしまう 1960 年代の不穏な事態によってダウンタウンが占拠されてしまうことによって、再植民地化への努力は妨げられた。しかし、1968 年のマーティン・ルーサー・キング Martin Luther King 師の暗殺の後で都市を揺さぶった暴力の結果として、まとまろうとする感覚と都市への帰属意識の復活を試みてみようとする諸組織の連合が活気づいてきたのであった。その連合は幅広いものであった。それは諸教会（とくに黒人聖職者同盟）、あらゆる種類のコミュニティ・リーダー、知識人とダウンタウンの法律家、政治家、労働組合員、官僚、そしてこの場合にしんがりをつとめたのは、平たく言えば何をし、どこへ向かうべきか途方に暮れていたビジネス界であった。その闘争は、人種的および社会的不正義に目覚めた職住コミュニティとして、また凝集力を持った社会的実体として、都市を回帰させる試みであった。

その努力から生じた一つのアイデアが、インナー・シティに都市の祭りを創造することであった。これは、この都市にはっきり存在する宗教的・民族的そして人種的構成に基礎を置くことによって、「他者性」と差異の存在とを祝い、しかしまたその多様性の内部に市民のまとまりがあるというテーマをも祝おうとするものであった。1970 年には第 1 回の祭りが行われた。週末に 25 万人の人々があらゆる近隣地区から、不満に満ちあふれたインナー・シティの都市空間へと向かったのである。1960 年代には思い浮かべることすら不可能なやり方でもって、1973 年までに約 200 万人が訪れ、インナー・ハーバーはその一般大衆によって再び占拠されたのであった。それは、差異ある中のまとまりを共同社会として肯定してゆこうとする場所となったのである。

大衆反対運動がかなりあったにもかかわらず、1970 年代の間に、商業主義と不動産開発の営力はこの空間を再び捉えた。そこでは莫大な額の公的資金が市民の利益に向けてよりも私的な諸目的のために吸収され、まさに官民協力体制を発現する場所となった。アメリカ地理学者協会大会の諸集会のための本部が置かれたハイアット・リージェンシー・ホテルは、500 万ドルの私的資金、1 千万ドルの都市開発活動基金、そして約 2 千万ドルの市の公債発行を充てたインフラストラクチュアと箱ものへの複雑な交渉の結果決まった都市の投資とによって建設された。そのインナー・シティ空間は、市民的な価値よりも、誇示的消費と称えられた諸商品から成る空間と化した。それは、その内部において人々が空間の領有における能動的な参加者から受動的な見物人へと成り下がる、「スペクタクル」の場となった（Debord, 1983）。現実には深刻な貧困化と権力の剥奪であり、その時にこのスペクタクルは、都市のそのほかの部分残余の地域のひどい貧困から注

意をそらし、成功したダイナミズムのイメージを投影した（Levine, 1987）。それらのすべての資金がインナー・シティの再開発に注がれていた一方で、都市のそのほかの部分は少ししか得るところがなく、場合によっては多くを失いすらしてまで、衰退の大海の中に豊かなダウンタウンの島が創造されたのである（Szanton, 1986）。そのインナー・ハーバーのきらめきは、もう一つのボルティモアに寄せ集められた不公正の悲劇から注目をそらさせ、今や目にみえない絶望の近隣住区の中にそうしたもう一つのボルティモアは安全裏に（あるいはそう思われるだけかもしれないが）隠し込まれたのである。

こうした諸例が物語る重要な点は、社会空間がある所与の社会構成体の軌道の中で対抗［関係］にさらされる時、社会空間がいかに新しい定義と意味とを帯び始めるかを示すことである。我々は、パリとボルティモアの双方において、戦略上重要な都市中心部の空間を支配するための闘争を、階層と純粋な貨幣権力による景観を平等性と正義のイメージにおいて構築された社会空間におきかえようとして対抗するより大きな闘争の一部であるとみなしている。両方の闘争は成功しなかったが、それらの闘争は、いかに社会空間（そして時間）に関する優勢で支配的な定義が永続的に喚起され続け、常に改変にさらされているかをまさに示しているのである。

空間と時間に関する歴史地理についての唯物論的諸視点

もしも、空間と時間の双方が社会的かつ客体的であるならば、社会諸過程（既に概述した社会的コンフリクトを含む）はそれらの客体化において果たすべき役割を有している、ということになる。それでは、社会空間と社会時間とが異なる歴史的および地理的なコンテキストにおいて形成される様式の研究へと、我々はいかにして出発したらよいのか。我々の存在論的および認識論的なコミットメントがはっきりどのようなものであるかということと無関係に、このことについての解答はあり得ない。私自身のコミットメントは、よく知られているように、明示的にマルクス主義的なものであるから、歴史地理的唯物論の基本的な諸原則にしたがって探究されることになる。客観的諸定義は、まず第一に、思考と観念の世界に訴えることによってではなく（こういう研究は常に貴重ではあるが）、社会的再生産の物質的な諸過程の研究から理解されるべきである。スミス（Smith, 1984, p.77）は、その点について、「空間の相対性は哲学的な問題ではなくて、社会的および歴史的実践の生産物である」と述べている。

そのような原則が作用している様を私に描写させてほしい。私は、しばしば地理学の入門学生に対して、彼らが一番最近とった食事〔食材〕がどこから来ているか考えるよう質問する。その食事の生産において用いられた、あらゆる品目をさかのぼって追跡することは、生産に関する極めて異なる社会諸組織と諸条件とのもとでの、多くの異なる場所で執り行われる、全世界の社会的労働の上に依存したある関係を暴き出す。我々が直接的に消費する財の生産において用いられるその原料および財を考える時、その依存性はさらに広がる。しかしながら、実際には、我々のテーブルに食事をのせるシステムの中に埋め込まれている生産の複雑な地理〔学〕と無数の社会諸組織とについての、ごくごくわずかな知識も持つことなく、我々は食事を消費しているのである。

これは、マルクス（Marx, 1967, pp. 71-83）が彼の最も有力な概念の一つ――商品の物神性――を展開するに当たって取り上げた状況であった。彼は、この用語によって、諸市場が社会的な（そして、地理〔学〕的な、ということを我々は加えなければならないが）諸情報と諸関係とがどのように隠蔽されているのかを追究した。商品を一瞥しただけで、それがイタリアの協同組合の幸せな労働者たちによって生産されたのか、南アフリカのアパルトヘイトの状況下で働いているひどく搾取されている労働者たちによって生産されたのか、あるいは、スウェーデンの充分な労働諸法規と賃金に関する合意のできている賃金労働者たちによって生産されたのか、我々は言い当てることができない。スーパーマーケットの棚の上に置いてあるブドウは無言である。我々はそれらの上に搾取の指紋〔刻印〕をみいだすことはできず、世界のどの部分からそれらがやって来たか即答もできない。我々はさらなる追究によって（非組合員によって、または南アフリカで生産されたブドウの不買運動を我々が行う時のように）、この地理的および社会的な無知を蔽うベールを持ち上げ、これらの諸問題に我々自身を気づかせることがで

きる。しかし、そうするに際して、社会がいかに作動しているかを理解するためには、我々は市場そのものが暴き出すその背後やその向こうに進まねばならないのである。このことは、まさにマルクス自身の研究課題であった。我々は、社会的再生産の完全なストーリーを語るために、そのベールを取り去って、市場と商品の物神性を解明しなければならない。

商品の物神性から生じる地理〔学〕的無知は、それ自体関心をそそる。市場の場所で諸商品を調達する我々自身の個人的経験の空間的到達範囲は、諸商品自体が生産される空間的到達範囲と何の関係も生じない。その二つの空間地平はまったく異なっていて、前者の視点からみて合理的であると思われる決定は必ずしも後者の視点からは適切なものではない。空間と時間に関する歴史地理の理解において、どちらの一連の経験に我々は訴えるべきなのだろうか？厳密に言えば、私の解答は両方ということになろう。というのは、両者はともに等しく物質的であるからだ。しかし、我々が物神性に関するマルクス主義の概念をそのすべての力でもって展開するべきであると私が主張するのは、まさしくこの点においてなのである。もしも我々が個人的な経験（スーパーマーケットで買い物をし、通勤し、そして、銀行で貨幣を下ろすこと）の範域の方を、存在するありのままの姿で採用するならば、我々は世界（空間と時間の客体的な社会的定義を含む）の物神的な解釈に到達するであろう。これらの諸活動は、現実的で物質的であるが、それらの諸組織〔これらを作動させる機構〕は、価格を決定する諸市場を通じた商品生産と資本流通との要求に応じて設定される空間と時間に関する別の定義を隠してしまうようになっているのである。

我々自身の日常的再生産の物質的土台〔下部構造〕についての純粋な関心は、商品生産の地理に関する、また、商品生産と資本流通の諸実践の中に埋め込まれた空間と時間の定義とに関し、実際的な知識というものをきっぱり語るべきである。しかし現実に、大部分の人々は〔これらの知識を〕なしですますのである。このことはまた、重大なモラルの問題をも生じさせる。もしも例えば、夕食のテーブルの用意を手伝う人々に道徳的な関心を寄せることがまさしく適切であるとするならば、その道徳的責務を拡大して、入り組んだ諸市場に関する全体的で複雑な地理と社会性とを考えてゆくことになるだろう。我々は、日曜日に教会へ行き、教区内の貧しい人々を助けるための基金にたっぷりと寄付をし、その後それをすっかり忘れて、アパルトヘイトの状況下で育ったブドウを買いにマーケットへ歩いて行くなど、理性的にはできない。必然的にどこか別の場所の大気を汚染することを意味するようなあるレベルでの生活を相変わらず主張しながら、近隣での高い環境の質のことを議論することは我々には理性的にはできない（このことは結局、エコロジストたちの議論の中核である）。我々の問題は、実際のところ、マルクスが我々に教示しようと努めたまさしくその問題である。我々は、我々が必然的に商品生産と交換のシステムによって取り巻かれているのと一緒に存在する物神性のベールに忍び込み、その背後にあるものを発見するべきである。とりわけ、我々に日々のパンを与えているこれらの物質的諸過程によって空間と時間とがどのように定義されるのかということを、我々は知る必要がある。いま私が向かっていくのは、まさしくこうした世界の中へなのである。

資本主義期における空間と時間に関する歴史地理

西洋資本主義の時期における空間と時間に関する歴史地理について考えてみると、政治的・経済的諸実践に応じて、空間と時間の両者に関する考え方と諸実践とがいかに変わったかが描き出されよう。封建主義から資本主義への変移は、ル・ゴフ（Le Goff, 1980, 1988）が議論するように、まったく新しい社会的諸原則にしたがって世界を再秩序化するのに役立つ空間と時間の考え方の再定義をともなっていた。「時」は 13 世紀の発明であったし、「分」と「秒」は 17 世紀にようやく尺度となったのだった。これらの尺度の最初のもの〔「時」〕は、宗教的な起源（ユダヤーキリスト教的世界観と資本主義の生起との間の深い連続性を示している）を持つが、計時のための詳細な尺度〔「分」「秒」までの時間単位〕の広まりは、生産、交換、交易、管理における効率性についての関心の増大とよりいっそううまく対応していった。それは、メンタルな構造と物質的な表現における、都市に基盤を置いた革命であり、ル・ゴフ（Le Goff, 1980, p.36）によれば、それは「階級闘争の諸メカニズムの中に深く巻き込まれていた」。ランデス（Landes, 1983, p.78）が主張す

るように、都市における「均等な『時』」は、「新しい文化的および経済的秩序の勝利を宣言した」。しかし、その勝利は、19 世紀半ばまで西洋社会の全域には到達しておらず、部分的でつぎはぎのものであった。

封建主義から資本主義への移行における地図学の歴史は、計時の歴史と同様に、ほとんど、明白に定義された数学的諸原則にしたがった空間的な測定と表現の洗練化であった。ここでもまた、交易と商業についての、あるいは、財産と土地の権利（封建時代の世界では認識不可能な類のもの）についての関心は、メンタルな構造と物質的諸実践の再形成に際して、最高に重要なものであった。地理的知識が武力と経済力についての重要な源であるということが明らかになった時、地図と貨幣は、ランデス Landes （1983, p.110）が示すように、すぐに結びついた。1400 年におけるプトレマイオス Ptolemaios の地図のフィレンツェへの導入と、地理的空間を描き立地情報を蓄積するための手段としてそこでただちに採用されたことは、我々が現在知っている地理的知識の構築において、まちがいなく基本的な大躍進であった。その後、一般原則として、世界を一つの球状の統一体として理解することが可能になった。

この地図学的な変革の政治的な意味は、考慮するに値する。例えば、合理的数学的な空間と時間に関する考え方は、政治的等質性と社会的進歩の啓蒙思想のためには必要な条件であった。フランス革命議会で最初にやったことの一つは、政治的表現の等質性を確保するための手段としてのフランスの体系的な地図化を指令することであった。これは、（ゲリマンダー化の全歴史を考えてみれば）世界の民主主義においてとても馴染みのある立憲〔体制〕上の問題であるので、民主主義と合理的地図化との密接なつながりは、今や当然のことである。しかし、マッパ・ムンディ Mappa Mundi〔キリスト教的世界観を色濃く反映した、主として西洋中世の世界図〕でのみ武装した平等主義的表現体系を描きあげる試みを想像していただきたい。いまだに合衆国の景観において優勢な、くどい数学的グリッドをともなったジェファーソン Jefferson 流の土地システム〔タウンシップ制など〕も同様に、農民民主主義の形成を促進するための空間の合理的な区画化を探求したものであった。実際には、ジェファーソンのねらいを覆して、資本家による空間の領有と空間への投機に打ってつけのものになってしまったが、それは同時に、客体的社会空間のある特定の定義が（この場合、合理的啓蒙的な諸用語で厳密に解釈された）、いかに新しい種類の社会秩序の勃興を促したかを示している。

ル・ゴフとランデスが示した類の説明は、空間と時間の概念とそれらに関連した諸実践は、人間が関わる事象において社会的中立とはほど遠いことを紛れもなく例証しているのである。まさに、そのような政治的および経済的な包含関係のために、空間と時間の感覚は、我々がそうと認める以上に、対抗にさらされ、より問題をはらんだままなのである。例えば、ヘルガーソン（Helgerson, 1986）は、ルネサンス期のイギリスの諸地図（Speed, Nordon, Caxton ほかによる）、王朝の特権争い、そして王朝の特権が、個人と国家の間のヘゲモニー的関係がもたらす政治によって置き換えられるといった諸々の間の密接なつながりを指摘している。ヘルガーソンの説明のポイントは、地図学的表現の新しい方法を用いて、諸個人は、自分自身を新しい社会的および政治的諸関係の定義と調和的に捉えることが可能になる点にある。より後の時代の例をとれば、植民地時代には、植民地行政に関する地図類はそれらの社会的目的を反映して極めてはっきりした特質を有していた（Stone, 1988）。

私は、上述のテーマについては他所でふれたので（Harvey, 1985, 1989a）、ここでは、空間と時間に関連した新しいメンタルな考え方とメンタルな諸実践とが、一つの特別な社会経済システムとしての資本主義の勃興にとってなくてはならないものであった、ということを言うにとどめよう。これらの考え方と諸実践は、常に部分的なものであり（資本主義の進化にともなって、それらはヘゲモニー的になったが）、いずれの場合にも、それらは特定の時間と場所における社会的な対抗に常に左右されるのであった。だが、資本主義的な類の社会的再生産は、社会的諸実践の領域においてと同様に、観念の世界に深く根を下ろすことを要求した。

しかしながら、資本主義は、常に休むことなく新しい組織形態、新しい技術、新しいライフスタイル、そして新しい生産と搾取の様式性を探し求めている、生産の革命的様式である。資本主義はまた、時間と空間に関するその客体としての社会的定義に関して革命的であり続けた。実際、技術革新に関するほとんどすべ

てのほかの形態と比較した時、空間的関係と空間的表象とのラディカルな再組織化は、ずばぬけて強大な効果を持ち続けている。有料道路と運河・鉄道・蒸気船と電信・ラジオと自動車・コンテナ化・ジェット機貨物輸送・テレビ・テレコミュニケーションは、空間と時間の関係を変えてしまい、空間表現の新しい様式のみならず新しい物質的諸実践へと我々を向かわせた。時間を計り分割する能力は、最初は、ますます精密化する時計の生産と伝播を通じて、つづいては、生産のスピードおよび調整メカニズム（オートメーション、ロボット化）への、そして財・人々・情報・伝言などの動きのスピードへの、密接な注目を通じて、革命され続けた。客体的な空間と時間の物質的土台は、人間に関わる事象における、不動のと言うより急速に動く基準点になっていった。

なぜ、このような動きになるのか？そのルーツについて私は他所（Harvey, 1982, 1989a）でかなり詳しく述べたのだが、その主要な議論について簡単に要約してみよう。時間は、資本主義のもとでは極めて重要なものである、というのは社会的労働時間は価値の尺度であり、社会的剰余労働時間が利潤の源泉に横たわっているからである。さらに、（生産、市場取引、資本回転における）スピード・アップは、個々の資本家たちが利潤を増大させるための強力な競争手段であるから、資本の回転期間が重要である。経済危機と特に熾烈な競争の時には、より速い回転期間を有する資本家たちは彼らのライバルよりもよく生き残るし、その結果として社会的時間地平は典型的に短縮され、労働と生活の集約性が活発になる傾向を示し、変化のペースが加速していく。同じ類の説明は空間の経験にも当てはまる。空間的障壁の除去と「空間を絶滅させる」ための闘争は、資本蓄積の全体的動態にとって本質的なものであり、資本の過剰蓄積の危機において、とりわけ深刻なものとなる。新しい領域への地理的拡大と、空間的諸組織の集合を完全に新規に建設することを通じた、資本（と、しばしば労働）の剰余の吸収は、まったく顕著となってきている。空間的諸組織とグローバルな空間経済の構築と再構築は、アンリ・ルフェーブル（Lefebvre, 1974）が鋭く観察したように、資本主義の 20 世紀への生き残りを可能にした主要な手段の一つだった。

生起する空間と時間に関する歴史地理の一般的特色（どこで、いつ、どのようにということを詳述するのとは対照的に）は、偶然的ないし任意のものではなく、資本主義発展のまさしく運動法則に含意されている。一般的には、回転期間（生産、交換、消費の世界はすべて早く変わっていく傾向にある）が加速され空間地平が縮小される傾向にある。ポピュラーな言葉を使えば、トフラー（Toffler, 1970）のいう「未来への衝撃 future shock」の世界が、いわば、マーシャル・マクルーハン（McLuhan, 1966）のいう「地球村 global village」に遭遇する、とでも言えようか。時間と空間の客体としての社会的特質において起こる周期的な革命は矛盾なしではすまされない。例えば、緩やかな回転期間の固定資本投資（コンピュータのハードウェアのようなもの）について、残りの回転期間をスピード・アップするには長い期間がかかるし、しばしばコスト高にもなり、さらに、時間による空間の絶滅のためには、特殊な道具立てとしての空間的組織（鉄道網のようなもの）の生産が必要となる。それゆえ、時間的および空間的諸組織の革命は、先立つ時間－空間システムをめぐって構築されていた生活様式と社会的諸実践との破壊のみならず、景観に埋め込まれた広い領域にわたる物的資産の「創造的破壊」をもしばしばともなうのである。近年の脱工業化の歴史は、私が思い浮かべる類の過程を如実に表わしている。

資本蓄積に関するマルクス主義理論は、西洋資本主義での空間と時間の次元性において生じてきた矛盾した変化に対する理論的な洞察を可能にする。現代のウォールストリートの時間的および空間的世界が、19 世紀の株取引のそれと極めて異なっており、そして、両者のどちらもがフランス農村地域（当時および現代）またはスコットランドの小農のそれ（当時および現代）とかけ離れているというのが実際そのとおりならば、このことは、商品生産と資本蓄積の諸ルールによって形成され普及した集合条件に対する、一連の特定の回答として理解されなければならない。私が検討したいのは、まさしく、そこに含意されている矛盾と緊張関係なのである。

空間と時間の変化する次元性に対する文化的および政治的応答

社会空間と時間の客体的特質における急速な変化は、

正確には社会秩序にとってそれらの革命的な含意が予期不可能であるから、混乱的であり、かつ攪乱的なものである。それについての切実な驚きが 1839 年の『*Quarterly Review*』に見事に捉えられている。

もしも、我々の鉄道が、まさに我々が今日の沸き立つような旅行熱をもってイングランド全土に突然敷設されたとしたら、この国の全人口は、比喩的に言えば、即座にまとまって動き、そして自分たちの椅子を大都市の炉辺へと置くだろう。....このように距離が絶滅されれば、我々の国の表面は、いわば、一つの広大な都市よりもさほど大きくないほどまでに縮まってしまうだろう（Schivelbusch, 1978, p. 32 より引用）。

詩人のハイネ Heine も同様に、パリからルーアンまでの鉄道の開通に際して「ものすごい予感」を記録している。

我々のものの見方や我々の考え方において、何という変化が今起こっているのだろうか！時間と空間の初歩的な概念すら変わり始めている。空間は、鉄道によって殲滅される。すべての国の山と森がパリへ向かって進んでいるかのように思える。今でさえ、私はドイツのシナノキの香りをかぐことができる。北海の波濤が私の部屋のドアに向けてうねってきている（Schivelbusch, 1978, p. 34 より引用）。

ドイツの劇場監督であるヨハネス・ビリンガー（Birringer, 1989, pp. 120-38）は、現代という場面設定において、同様のショックの感覚を記録している。ダラスとヒューストンに到着して、彼は「予期せぬ空間の崩壊」を感じ、そこでは「都市という身体の散乱と分解（コミュニティの物理的および文化的表象）が幻覚的な段階にまで達していた」。彼は、次のように評している。

地理的リアリティの避けがたい融合と混乱、もしくはすべての場所の交換可能性、もしくは可視的（静態的）な参照点が、表層的イメージの絶えざるコミュニケーションの中に消失してゆくこと。

ヒューストンの謎について、彼は、こう結論づけている。

〔それは〕一つのコミュニティである。あらゆる方向へ向かって断片化し爆発した....。ヒューストンは、投機的な無秩序、逆説的誇張法すれすれでの一種の積極的な非特殊性、を模倣している（グローバルなパワー／ローカルなカオス）。

ハイネの予感の感覚とビリンガーの崩壊の感覚のいくばくかを捕えるために、私は、時間－空間の次元性における圧倒的な変化のこの感覚を、「時間－空間の圧縮 time-space compression」と呼ぼう。それに関する経験は、我々のすべてをして、空間と時間に関する我々の考え方を調節せしめ、社会的行為に対する視点を再考せしめる。私が既に議論したように、この再考は、政治的経済的闘争に埋め込まれている。しかし、それはまた、文化的、審美的、そして政治的な強烈な議論の焦点でもある。こうした考え方に関する省察を通じて、資本主義期に文化的および政治的生産の分野の内部で起こったいくらかの混乱を、我々は理解することができるのである。

例えば、「ポストモダニズム」として知られるような、最近の〔思想〕運動の複合体は、ジェームソン（Jameson, 1984）、バーマン（Berman, 1982）、そして、ダニエル・ベル（Bell, 1976）といったような、多様な著者たちの書き物の中で、空間と時間に関するある種の新しい経験と結びついていた。興味深いことには、その考え方を提起したのはよいが、それが何を意味しているのか、彼らのうちの誰も我々に対して正確には伝えてはいないのである。そして、これらの新しい空間と時間の経験が築きあげられるところの物質的な基礎 basis と、資本主義発展に関する政治経済との関係は、影の中で見失われてしまっている。1973 年の政治経済的危機から生じた空間と時間に関する新しい経験に関連づけさえすれば、ポストモダニズムがどの程度理解できるのかの見極めに、私は特に関心を寄せている（Harvey, 1989a）。

その当時、先進資本主義世界の多くは、生産技術、消費習慣、そして政治経済的諸実践における主要な変革を強いられた。強大なイノベーションの趨勢が〔資本の〕回転期間のスピード・アップと加速に焦点を当てた。意志決定のための時間地平（国際金融市場では、今や「分」刻みの問題になっている）は短縮され、ライフスタイルの流行は急速に変化してきた。そして、このすべてのことは、空間諸組織の根底的な再組織化、

空間的障壁のさらなる減衰、そして、資本主義発展に関する新しい地理の出現と一体になっている。これらの出来事は、文化的および政治的生活のすべての局面に影響を与えてきた時間－空間の圧縮についての強力な感覚を生じさせた。すべての景観は、新しい景観の創造に道をゆずるために、破壊され続けなければならなかった。創造的破壊、増大する断片化、うつろいやすい一時性（コミュニティでの生活において、技能に関して、またライフスタイルに関して）などに関する諸テーマは、産業的生産技術からインナー・シティまでのすべてのもののリストラクチャリングが関心の主要な論点になってきた一時代において、文学や哲学の中でよりいっそう顕著になってきた。ポストモダニズムへの動きに示されている「感覚の構造」における変容は、過去 20 年間にわたって生じてきた政治経済的諸実践の変移と大いに関係があり続けているように思われる。

振り返って、モダニズム（ポストモダニズムは、それに対抗して反応しているものと思われるのであるが）として知られる、あの複合的な文化的運動のことを考えてもいただきたい。1848 年〔フランス二月革命が勃発した年; ルイ・フィリップ Louis Philip が退位し、第二共和制となった〕後のパリで見られた書き物と芸術的表現には、実際何ほどか特別なものが存在していて、それをその空間とその時間において生じている政治経済的変容の背景に照らし合わせてみることは有用である。この 1848 年とは、資本主義世界で初めて政治経済が予期しなかった同時性を帯びた時であり、ハイネの漠然とした予感は、劇的で衝撃の大きい〔実際の〕経験となった。1848 年のヨーロッパの資本を掃きちらした経済的崩壊と政治的革命は、それまで想像できないと思われていた方式で資本主義世界が相互結合するということを示した。そのことに関するスピードと同時性は根深いところで混乱を起こし、この相互結合した世界がよりよく理解されるための、ある種新しい表象様式を要求した。現実主義者の表象様式は、そのモデルとして一つの単純な語り口の構造をとるが、簡単に〔新しい表象様式のようには〕言い尽くすことはできなかった（たとえいくらディケンズ Dickens が『荒涼館 *Bleak House*』のような小説ですごくうまく空間と時間を渡り歩いていたにせよ）。

ボードレール（Baudelaire, 1981）はこうした仕事に挑戦して、モダニストの問題構制を、（空間的）分断化と、（時間的）一時性と、創造的破壊とによって特徴づけられた世界において普遍的な真実を探求することであると定義した。フロベール Flaubert の小説類における複雑な文章構造とマネ Manet の筆致とは、新しい思考方式と社会的および政治的行為にとっての新しい可能性を与える空間と時間のまったく新しい表象様式を明示した。カーン（Kern, 1983）は、1914 年少し以前（物理学・文学・絵画・そして哲学など多様な分野において極めて特色ある実験が行われた時期）に短期間のみ生じた、空間と時間の表象における革命について説いたが、これは、新しい考え方が絞り出されてくる諸経験をどのように時間－空間の圧縮が生じさせるのか、ということに関する現時点での最も明白な研究の一つである。文化領域における前衛運動は、空間と時間に関する新しい諸定義を部分的には反映するものであり、また部分的には、暴力的な変容の大洪水の中での西洋資本主義にこの新しい定義を押し付けることを探求したのであった。

これらの文化的および政治的運動にビルト・インされた諸矛盾をじっくりとみると、それらがいかに資本主義の政治経済における基本的な諸矛盾を映し出しうるかがわかる。資本の回転期間の近年のスピード・アップと加速に対する文化的応答を考えてみよう。まず第一に、文化の側の応答は、結果的に生産と消費の資本主義的社会諸関係の焦点となっている消費習慣とライフスタイルにおけるより急速な回転を前提とする。自動車や冷蔵庫のようなより有形の物品に対して、諸イメージの消費の寿命はほとんど即時的であるので、文化的生産の範域への資本主義の影響力は、とりわけ魅力的なものとなる。近年では、大量の資本と労働とがこの目的のために充用されてきた。このことは、便利なことに資本蓄積と社会的管理の手段として（非常に不安定な時代における「パンとサーカス」〔転じて、一時しのぎの手段の意味〕という古代ローマの決まり文句への政治的関心をよみがえらせながら）、この二役〔資本蓄積と社会的管理〕をこなすことができる管理されたスペクタクル（ロサンゼルスのオリンピック大会が、その最も適切な例の一つ）の生産の新たな強調をともなってきたのである。

空間的障壁の崩壊に対する対応には、まさるとも劣らぬ矛盾がある。相互関係がよりグローバルになれば

なるほど、我々のディナーの食材と我々の貨幣の流れはより国際化するし、空間的障壁が分解すればするほど、場所と近隣、あるいは、国家・地域・エスニック集団化、あるいは、アイデンティティ特有の一つの表徴としての宗教的信条などにしがみつく世界の人口は多くなっていく。そのようなアイデンティティに関して可視的で有形の表徴を追求することは、熾烈な時間－空間の圧縮のまっただ中でたやすく理解できる。たとえ資本主義的応答が次々と商品生産と消費品目の伝統を発明してきたにせよ（古代の儀式と見世物の再演、はびこる遺産文化の過剰）、イメージの潮流が加速し、ますます非場所的になっている世界でルーツを求めることを駆り立てる主張が（テレビとビデオのスクリーンが、まともな場所としてみなされ得ないかぎり）まだ存在している。我々のうちで内破する社会空間に関する感覚から生じた予感は（日常的ニュースから、そこここで秩序なく生じる国際テロまたは地球環境問題に関する行為に至るあらゆることによって強力に表徴されて）、アイデンティティの危機へと換言される。我々は誰で、どのような空間／場所に我々は属しているのか？私は、世界の、国の、ロカリティの住民なのか？資本主義の歴史の中で最初のことではないが、もしも、第１次世界大戦前の時期についてのカーン（Kern, 1983）による説明が正しいならば、空間的障壁の減衰は、まさに他者に対抗して分離し防御する空間的障壁の力の衰退のゆえに、ナショナリズムと地方主義に関する感覚を増強させ、過度の地政学的競争と緊張を生じさせたのである。

場所と空間の間の明らかな緊張は、私が既に言及した資本主義の政治経済に関する、あの基本的な矛盾を反映している。ある特有な空間の組織化が、空間を絶滅させようとするのに必要になるということ、そして、長い回転期間を有する資本が、残りのほかの資本のより速い回転期間を促進するために必要であるということである。この緊張は、また他の視点からも検討されうる。多国籍資本は今日貧しい地理学的視点しか持っていないはずだ。というのは、正確には、空間的障壁が弱まって、全世界を儲けの出る牡蠣のようにこじあけているからなのである。しかし、空間的障壁の減衰は同様に強力な反作用を有している。多国籍資本が、小さなスケールで細かく等級づけられた場所の質の違い（労働供給、インフラストラクチュアと政治的感度、資源の混合、市場ニッチェなど）を搾取するのにより良い状況にいるので、いっそう重要にさえなっている。同様に、場所は、よりいっそうその「良好なビジネス環境」を気にするようになってきたし、開発のための場所間の競争は、よりいっそう微妙に調整されてきた。コミュニティのイメージ構築（ボルティモアのインナー・ハーバーを特徴づける類のような）は、都市間競争の強力な過程に埋め込まれてきた（Harvey, 1989b）。とりわけ金融と資金の流れに関して空間を支配する力がかつてないほどに顕著になってきているこの資本主義発展の局面において、場所の質に関する現実・架空双方の関心は増大している。場所に関する地政学は、より強調されていくような傾向にある。このように、グローバル化は、地政学的な対抗といがみ合う世界の中で戦いあう陣営というまったく対極の動きを、世界の中に生じさせた。グローバルな資本主義における地政学的断片化の脅威――ヨーロッパ共同市場、北米共同市場、日本貿易帝国のような、地政学的な力のブロックの間の――は、根拠がないものでは断じてなかった。

資本主義下での空間と時間に関する歴史地理と折り合うことが多大の意味を生むのは、まさにこうした理由からである。場所と空間の間の、そして長期と短期の時間地平の間の弁証法的対抗諸関係は、回転期間を加速し時間によって空間を絶滅するという、資本主義の底に横たわる至上命令が作り出した時間－空間の次元性における変移のより深い枠組みに存在している。いかに我々が時間－空間の圧縮を取り扱うのかについての研究によって、空間と時間に関する経験における諸変移が、美学と文化的表象のような分野における新しい闘争をいかに引き起こすのか、生産と同じ様に社会的再生産のとくに基礎的な諸過程が、変移しつつある空間と時間の地平にいかに深く包含されているのかが描かれる。余談であるが、この点に関して、例えば、フロベールとジョイス Joyce の小説類（文学史家にとっては非常に重要な論点の一つである）におけるような、空間性に関するよりいっそう基本的な問題が注目されないまま見過ごされてきた時に、これまで地理学の側の陣営から発せられてきた文学と地理学の間の諸関係に関する探究は例外なく、場所に関する文学的〔関心・注目の〕喚起に集中してきた（例えば Mallory and Simpson-Housley, 1987 をみよ）。あたかも空間と場所

とが、弁証法的に関係した概念であるよりも分離したものであるかのように、いわば、矛盾しあう空間と場所のダイナミクスのうちの一面に〔のみ〕よりかかりながら、地理学者たちが現在の急場においてロカリティの重要性に研究を集中させてきたことも、私には奇妙に思われる。

社会理論と美学理論との関係における地理学

歴史地理的唯物論が提示するような認識論的で存在論的な思考に傾倒し武装しながら、世界に関する特定の社会的諸ヴィジョンと諸解釈を（明示的であれ、暗示的であれ）支えている空間と時間に関する理論的および哲学的概念の解明から着手してみよう。そこでは、西洋思想の中の美学理論と社会理論の間の主要な分岐点についての考察から始めるのがよいであろう。

アダム・スミス Adam Smith、マルクスまたはヴェーバー Weber の多様な伝統の中に構築された類の社会理論は、その定式化において、空間よりも時間に特権を与える傾向にあり、空間を欠いた進歩と革命に関する学説のレンズを通して世界を眺めるように人々をしむけ、またそうすることを正統化してきた。近年、多くの地理学者たちは、こうしたヴィジョンの欠点を訂正し、社会諸過程の適切な理解にとって意味があるのみならず決定的に重要なものとしての空間に関する概念を再び導入しようとしている（Gregory and Urry, 1985 や Soja, 1989 をみよ）。何人かの社会理論家たちの側に、空間は本当に重要なことがらであると認識されることによって、ある程度その努力は報われてきた（例えば Giddens, 1984）。しかし、その作業課題は、ほんの部分的にしか達成されていない。商品の物神性の裏に分け入ることは、いかに人間諸社会が構築され変化するのかということに関するあらゆる我々の理解の枠組み内において、我々が空間と時間に関する歴史地理を統合することを要求している。社会理論への我々の参入は、たとえこのことがいつもながら、社会理論を自家薬籠中の物とするよう地理学者が修練することを前提とするとはいえ、そのテーマの探究によってさらに強められるし、社会と空間および時間の社会的構成との境界面にある困難な領野を探求する挑戦によっても、知的な把握がなされるであろう。

しかし奇妙なことには、これと別に、理論的に立ち入る余地のある領野が未探検のまま広大に残っている。この領野は、明白な諸問題と格闘するよりも、むしろ隠れたものをあら探しすることから常に生じる、満足がいかない部分的なやり方で探究されてきただけだった。ここで私が言っているのは、地理学的研究と美学理論との間の交差である。美学理論は、社会理論と直接的な対照をなし、その経験が物知りで感受性のある諸個人にどのように伝達され受容されるのかという点においてであるとはいえ、「時間の空間化」と深く関わっている。最も明白な事例をあげれば、建築家は、空間形態の建築を通じて、ある価値を伝達しようとする。建築〔学〕は、カーステン・ハリーズ Karsten Harries が示唆するには、空間を飼い慣らすこと、空虚な空間から生きられる場所を奪い取って形成することに関するだけではない。それはまた、「時間のテロル」に対抗した厚みのある防御でもある。「美についての言語」というものは、「非時間的現実についての言語」である。美しい客体を創造することは、時間の暴虐から我々を助け出すようなやり方で「時間と永遠性とをつなげること」である。空間構築物のねらいは、「我々がその中でより心安く感じるために時間的現実を光で照らすのではなく……ほんの一時的であるにせよ、時間の中の時間を撤廃することである」。ブルデュー（Bourdieu, 1977, p. 156）がコメントしているように、書くことでさえも、「時間の流れの中から外へと、実践と言説を引き剥がす」。

もちろん、社会理論と同じくらいたくさんの種類の美学理論がある（例えば、この課題に関する Eagleton, 1990 のすばらしい論文をみよ）。しかし、私は、美学理論が取り組んでいる中心テーマの一つを描き出すために、これらの諸コメントをハリーズから引用してみたい。すなわち、人間の記憶と急速に流転・変化する世界における社会的価値を固着した標識として、いかに空間構築物が創造され、使用されるのか。生産された空間のさまざまな諸形態が、いかに社会変動の諸過程を抑制したり促進したりするのかということに関して、美学理論から学ぶところが大いにある。興味深いことに、今や地理学者たちは、自分たちの努力に対して、社会理論家たちからよりも文学理論家たちから（Jameson, 1984 および Ross, 1988 をみよ）、より多くの支持を得さえしている。逆に、美学理論が取り組むべき流転と変化に関連している社会理論から学ぶべき

ところも大きい。それら二つの次元の交点に位置している限りにおいて、歴史地理学は、それら両者を理解することに貢献する可能性が大である。これら二つの思潮をお互いに対抗させることによって、我々は空間と時間に関する歴史地理を解釈するための、一方で同時に、社会および政治の変動に関する政治的・経済的動態の中に文化的および美学的諸実践――空間化――がいかに参入するかを描き出すための、より一般的なフレームワークを創造する希望さえもが開かれよう。

そのような議論の政治的重要性がどこに横たわっているのかを、私に描き出させてほしい。審美的判断（そこへ付着する「救済的な」芸術実践と同様に）は、しばしば、政治的および社会的行為の強力な規準として登場してきた。カント Kant は、独立した審美的判断は、客観的科学と主観的道徳判断の世界の間の媒介物としての役割を果たしうる、と論じた。もしも審美的判断が時間に対する優位を空間に与えたならば、空間的諸実践と諸概念は、ある状況下では社会的行為に対して中心的な存在となる、ということになる。

この点に関しては、ドイツの哲学者ハイデッガー Heidegger が興味深い人物である。主体と客体に関するカント流の二分法を拒絶して、ニーチェ Nietzsche 流の思考が助長しそうなニヒリズムへの転落をもおそれながら、ハイデッガーは、一時的な生成に対する存在の永続性を示し、真に審美的で政治的な国家に関するヴィジョンに自らを帰着させた（Chytry, 1989）。彼の探求は、彼自身をモダニズムの普遍性とユダヤ－キリスト教的思想から遠ざけ、ソクラテス Socrates 以前のギリシャ思想が持つ、強烈で創造的なナショナリズムへと回帰させていった。彼が宣言することには（Heidegger, 1959）、すべての形而上学と哲学は、民族の運命に関する限りにおいてのみ、その意味が与えられている。両大戦間期におけるドイツの地政学的位置は、ロシアとアメリカの間での「大挟撃」に封じ込まれながら、そうした意味の探求を危ういものにしていたのである。彼はこう書いている、「ヨーロッパに関する大きな決定が虚無化 annihilation〔ハーヴェイはこの単語を空間の「絶滅」（原語は Vernichtung）にも当てている〕をもたらすことのないようにするには」、ドイツ国家は「国家自身とそれゆえ西洋の歴史とを、それらの未来の『出来事』の中心を超えて、存在に関する諸力の原初的な範域の中へと、動かしていかなければならない」、そして「その決定は歴史的に中心の外側から展開している新しい精神的エネルギーに関連してなされなければならない」。ハイデッガーは、「国家社会主義運動の内的真実と偉大さ」をこの中に据えたのである（Blitz, 1981, p. 217）。

場所の意味に関する地理的な諸論文を知的に奮い立たせ（Relph, 1976; Seamon and Mugerauer, 1989 をみよ）、そしてついでながら、カーステン・ハリーズの哲学的思索をも知的に奮い立たせてててきた 20 世紀の一人の偉大な哲学者ハイデッガーが、それほどに自分自身を政治的に妥協させ、ナチスと運命を共にしなければならなかったことは、大変悩ましいことである。ハイデッガーの仕事には、生成と普遍的空間における近代主義的進歩の普遍的命題よりも、存在と場所の種別的な質を優位とみなすような審美観が根深く埋め込まれている〔原文では inbued だが imbued のミス・スペルか？〕。ユダヤ－キリスト教的価値観、機械合理主義の神話、そしてインターナショナリズムに対する彼の拒絶は全面的だった。至高の国家的課題達成のプロジェクトに向かって社会的進歩のすべての装備を動員させる一方で、正確には、彼は、神話（血と地、人種と父祖の地、運命と場所）の力の復興に事実上に依拠していた救済のための諸実践の必要性を知っていたから、彼が支持していた立場は、活動的で革命的なものであった〔ここでは、ナチスのアーリア人種論や再軍備、軍備近代化などが念頭に置かれているようである〕。この特別な審美感覚を政治に適用することは、資本主義の歴史地理をまさしく変更するのに役立った。

地理学者に対して、20 世紀における地政学的思考および諸実践に関するさいなまれた歴史と、〔自分たちが〕関連した難しい問題に直面した際に経験した困難を、思い出させる必要はほとんどないだろう。ナチスによるオーストリア併合 Anschluss〔1938 年〕の直後にウィーンで書かれたハートショーン〔ハーツホーン〕Hartshorne の『*The Nature of Geography*』（1939）が、全体的に地理学における美学を拒絶し、景観地理学の神話に対して極めて痛烈な批判に身を置いたということを私は注記しておこう。ハートショーンはヘットナー Hettner にならって、地理学が政治で満ちあふれて、場所と美学とに関する感情がナチスの運動の中で積極的に動員された一時代にあって、アカデミックな地理学を政治化しようとするあらゆる機会を排除し

たいと思っていたようである。もちろん困ったことに、アカデミックな地理学においても、問題を避けることは、そういう機会を除去することにならないのである。

ハートショーン以来、地理学に美学的次元を復活させることを探求してきたすべての人たちが、密かにナチズムを有した人であるというつもりはない、というのも、イーグルトン（Eagleton, 1990, p. 28）が指摘しているように、美学的なものは、ずっと「矛盾したあいまいな概念」であり続けたからである。一方で「それは、純粋に解放のための力として――感覚的な刺激と同志感覚によって今や結びついた諸主体からなる一つのコミュニティとして――現われながら」、他方で「それは、社会的権力をより深くそれが支配下においている身体に注入し、政治的ヘゲモニーのため至高の効果的様式として作用しながら」抑圧を内面化する役割を果たす。このような理由で、政治の美学化は長い歴史を持ち、社会的進歩に対して問題と可能性との双方を提示している。それには左派と右派のバージョンがある（サンディニスタ Sandinista〔ニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線、または、その運動; 1979年にソモサ体制を倒し、民族再建政府を樹立した〕は、結局、サンディーノ Sandino〔Augusto C. Sandino. (1893-1934); ニカラグアの革命指導者〕の肖像などで政治を美学化したし、マルクスの諸著作は、創造的感覚の解放の基礎となるプロジェクトへの言及で満ちあふれている）。最も問題となるのは、歴史的進歩とそのイデオロギーから、国家の（またはローカルな場合さえも）運命と文化を普及する諸実践へと強調が変移することである。ここから、世界経済の内部でしばしば地政学的コンフリクトの火花が散ることになる。場所、人そして伝統に関する神話への、そして審美的感覚への魅力は、地政学の歴史において決定的に重要な役割を演じてきた。

時間よりも空間に優位性を与える理解と、空間よりも時間に優位性を与える理解とを結び合わせながら、美学的視点を社会理論的視点と結合させることの重要性がここにあると思われる。歴史地理学一般と、空間および時間に関する歴史地理の研究とは、まさしくその交点に位置しており、それゆえ、人間諸社会がいかに機能しているかを理解するに当たって、主たる知的・理論的・政治的そして実践的な役割を有している。地理学の研究を空間と時間の間に位置づけることで、我々が学ぶところと貢献するところは、明らかに大きいのである。

地理学的想像力

私は、地理学の研究にとってまたアカデミックな分業の内部で「地理学者」とラベリングされているニッチェを占めている比較的小集団の研究者たちにとって、そのような視点が持つ意味に関する短いコメントでもって結論としよう。

地理学者とは、19 世紀後期の状況と関心の産物である。その際に引かれた（そして引き続いて専門職業化と制度化によって硬直化した）学問分野の境界線が、現代の状況とニーズに一致しているかどうかは、決して自明のことでない。部分的にこの問題に答えつつ、学界は諸学問分野内での分業においてますます断片化の方向へ動き、隙間隙間で新しい学問分野を生み出し、テーマとなる論点の結合を探し求めてきた。広い意味では、この歴史は社会における分業の展開に似ている。仕事と生産物がますます分化するとともに特殊化し、生産がますます迂回性を増し、そして水平的結合を探求することは、大きな大学における特色であるとともに、大きな多国籍企業体の特色でもある。地理学の内部では、この断片化の過程は、1960 年代半ば以来加速してきた。その影響によって、「学問分野」という単語でくくられる論理をアイデンティファイすることがより困難になってきた。

学界における思考の回転時間もまた加速してきた。さほど遠くない昔、一生涯のうちで２冊以上の本を出版することは、野心がありすぎると思われたものだった。最近では、先頭を走る研究者たちは、もしも自分たちがまだ生きているということを証明しようとするならば、２年ごとに１冊の本を出版しなければならないようだ。学界における生産性と産出物の定義はよりいっそう厳密に吟味されるようになり、昇任も、ますますその様なものだけで計られるようになっている。もちろん、ここの、研究と会社企業／国民国家の要望との間、学界と出版業界、先進資本主義社会における成長部門の一つとしての教育業界の出現との間には、ある種の交差がある。思考の生産のスピード・アップは、全体としての資本主義内の回転期間を加速することへの全般的な推力と並行している。しかし、より多

くの書籍と雑誌の産出は新しい知識の生産を頼りにしなけらばならないし、そのことは、新しい思考へのいっそう熾烈で競争的な探究、いっそう大きな独占的権益を意味しよう。もしも、アダム・スミスの見えざる手が、他の諸市場ではまったく有していないこうしたすべての効果を学界でなら有しているという場合にだけ、そのような狂乱的な活動は、合意の得た強固なある「真実」の上に収斂することができる。実際に、思考・理論・モデル・論点の目的に関する競争的な市場取引は、急速な回転、スピード・アップそして一時性を改善するよりはむしろ悪化させるような、「今月のカラー」のような流行を生み出す。去年は実証主義とマルクス主義、今年は構造化主義、来年は、現実主義で再来年は構成主義、ポストモダニズム、等々。今や学界内において回転している束の間の思考の旋回についていくよりも、ベネトンの提唱する色の変化についていく方が簡単である。

そのような諸潮流に対抗して我々が何をなし得るかを知るのは、たとえそれらの影響を嘆いたところで困難である。我々の職業についての説明書は、「知識人としての地理学者」のそれを包括しているわけではなくて、よりいっそう典型的に狭い範囲での、単なる技術（リモート・センシングとＧＩＳ）を使いこなせることから、輸送のモデル化・産業立地・地下水のモデル化・ソビエト地理学、または今月お好みの論点（持続可能な発展・カオス理論・フラクタル幾何学等々）におけるスペシャリストに至る、あらゆるものの熟練が特定される〔地理学者が各自の専門に特化していることを表現している〕。せいぜいできる最良のことは、専門家を採用し、地理学全体への関心を持つよう望んでみることだけだ。断片化と一時性に抵抗するのに、見かけ上無能力で気が進まないのは、我々のコントロールを超えた諸力が何かを我々に加えているような状況が、そこに暗示されているからだ。例えば、人間のかかわる事象における個々の行為主体 agency の力のことを今非常に声高に叫ぶ人々は、彼らまたは我々の特定の行為主体が我々の労働および生活の状況の中でのこの大変移をいかに生産してきたかを説明してほしいものである〔ギデンズらの構造化理論への皮肉か？〕。我々は社会諸過程の真の産みの親ではなくて、むしろ単なるそれの犠牲者なのだろうか？諸個人は歴史を作るために闘争するけれども、この闘争は自身で作った状況に置かれる中でなされるのではない、というマルクスの考え方。もしこの考え方を私がより好んでいるとするならば、それは、我々の大部分が一生涯にわたるまさしくその種の経験を背にしているからなのである。

多くの人文地理学者たちの関心の中心にあるものとして、美学、景観地理学、そして場所についての関心が再びよみがえっていることを考慮する時、これと同じ問題が思い起こされる。学界における地理学の場所=地位 place が、この学問分野〔地理学〕を場所（諸要素の唯一無二な編成として理解されるにせよ）に関する中核的概念と結び付けることによって保証されるという主張がある。場所の個別的な質が多国籍資本のより大きな関心となり、そして強力な時間－空間の圧縮の状況下で想定された安定性（たとえ架空のものであっても）からなる一つの闘技場として、場所に関する政治とイメージへの関心がよみがえってきたこの資本主義発展の局面において、こうした主張は勢いづいてきたと言える。場所におけるアイデンティティとルーツについての社会的探究は、急速に変化する世界の中において、地理学をライトモチーフとして再度登場させ、今度はより強力な（そして同じほどに架空の）アイデンティティに関する感覚を地理学にますます与えるようになる。

空間と時間とに関する歴史地理をより深く理解することから、なぜ地理学がこの時間と場所において、このような研究の繰り広げられる闘技場を育て上げるのかが、かなり明らかになってくる。それは、我々を取り囲み生活にふりかかる社会的圧力に対して我々がどのように働き返すかを評価するクリティカルな視点を提供する。我々の学問分野にとっての場所の重要性を深く考えずに受け入れると、美学化された地政学の再出現を意識下で支持するような危険へと我々は押し流されることになるのだろうか？こうした疑問を発することは、問題の回避を意味しているのではなくて、社会理論と美学理論の間の交点に位置している地理学の考え方を通じて、それに適切に対峙していかねばならないことを意味している。

空間と時間に関する歴史地理は、我々が誰で、我々が何と闘争すべきかということに関する批判的な省察を容易にしてくれる。空間と時間に関するどのような概念を、我々は創り出そうとしているのか？これらは

資本主義下において、変転する空間と時間の歴史地理〔学〕と、どのように関連しているのだろうか？ひとりの社会主義者における、または生態学的な責任をとりうる社会における空間と時間はどのようなものなのだろうか？結局のところ、地理学者たちは空間性とその意味に関する全問題を解決するための貢献者（しかも潜在的にはその点に関して強力で重要な貢献者）である。空間と時間の両方に潜在的な関心を持つ歴史地理学者たちは、そこここの場所と時間の歴史についてのみならず、社会生活と社会的再生産における空間と時間に関する、変転しゆく経験についての全体的な難問についても、省察を加える無限の可能性を有している。

空間と時間に関する歴史地理についての批判的な省察を通じて、空間と時間に関する諸思考の歴史は、それらの物質的、社会的および政治的道具立ての中に位置づけられる。ハートショーンは、『*The Nature of Geography*』を政治的真空の中ではなくて、オーストリア併合後のウィーンで書いたのであり、その事実（その著作の考察中では決して言及されていないのだが）は、思考の世界の中での構築と参入の様式の中に確かに存在している。この私のテキストは、同様に、時間－空間の圧縮に関する、あるいは、社会的再生産と政治的議論についての変移する基本的道徳観に関する、ある経験の光の中で構築されている。偉大なるカントでさえ、社会的真空状態の中で、空間と時間に関する彼の議論を展開し、また美学的・道徳的・科学的判断の間に区別をつけたのではなかった。彼の仕事は、当時、18 世紀末にヨーロッパで吹きまくっていた革命の衝撃のまっただ中で明らかにされてきていた啓蒙的理性のブルジョア的論理に固有の明らかな矛盾を、コード化し総合化するという偉大な試みなのだった。それは、合理的で数学的な正確さで空間と時間とを統御することに特別で実践的な関心を持ったその社会では極めて特色ある成果だったが、一方で、資本主義初期の社会諸組織を所与とした時、そのような理性的秩序を伝授するに際してのすべての葛藤と矛盾を経験していた。もしも、ヘーゲルがカントを攻撃していたら（美学から彼の歴史理論に至るすべてについて）、もしも、マルクスがヘーゲルとカントの両方を攻撃していたならば（再び、美学から物質性と歴史に関する基礎的な諸々の考え方に至るすべてについて）、こうした諸議論は、社会変動の筋道を再定義するあらゆる試みと関わることになっていたであろう。諸矛盾、明らかな不正義、そして意味のない「蓄積のための蓄積」という資本主義の論理を超えた、秩序ある社会革命に、もしも私がマルクス主義者としてなおこだわっているとしたら、このことは、その探求の本質的な眼目として空間と時間の意味を再定義する闘争に私をコミットさせるであろう。そして、もしも私が新カント主義が優勢な学界（いうまでもなく、多くの人はそのことを知らないままであるが）においてなお多分に少数派であるならば、このことは、資本主義的社会諸組織とそこに引き出されてくるブルジョア思想との永続性とを、それらが定義し客体化する空間と時間をも含んで証明するものにほかならないであろう。

空間と時間に関するある考え方に愛着を感じることは、一つの政治的な決定であり、空間と時間に関する歴史地理は、それをそうであるように明らかにするのである。プロの地理学者として、どのような類の空間を我々は引き立てたらよいのだろうか？それらの概念が、社会的再生産のどの過程を微妙にしかし執拗に暗示しているのだろうか？地理学的素養という言語能力をつけるための現代のキャンペーンは賞賛されるべきであるが、しかし我々が教えるのはどのような素養なのか？我々の学生たちにチャドと国境を接している国がいくつあるのかを学ぶということを我々は単に主張するのであろうか？我々はプトレマイオスの天動説の静態的合理性を教え地図化されうるのならばなんでもそれは地理学であるという、ハートショーン流の地理学の現代版であるＧＩＳ以上の何ものでもないということを主張するのか？もしくは、現代世界における我々のディナー・テーブルの背後から始まって労働活動のほとんどすべてのニッチェまで広がる社会的および空間的諸関係に関するすべての複雑な歴史でもって、我々は商品に関する豊富な言語を教えるのか？そして、我々はさらに進んで、地理的不均等発展に関する、あるいはまだほとんど歴史地理が再構成されていない環境変容（森林破壊、土壌侵食、水質変異、気候変化）に関する、豊かで複合的な言語を教えることができるのだろうか？ 我々はさらに進んで、いかに社会諸過程が政治的議論に美学的形態を与えうるかについての深い認識を創造することができるのだろうか（そしてその中に潜在しているあらゆる危険を評価することを

学ぶこともできるだろうか）？我々は一つの言語――一つの学問領域全体でさえも――を、空間と時間の歴史地理の感覚の内部で、環境的なもの、空間的なもの、および、社会的なものを融合させるプロジェクトをめぐって打ち立てることができるのだろうか？

すべてのそのような可能性は、探究されるために存在している。しかし、どのような道を我々がとろうとも、我々がどのような種類の空間と時間を引き立てようとするかについての、政治的関与は必ずともなってくる。我々は政治的な行為主体なのであり、そのことに気づくべきである。ヨーロッパのアメリカ系通信会社の市場取引責任者が銀行家のトップたちと行った会話に関してコメントした（*International Herald Tribune*〔パリで発行されているアメリカ系新聞〕、1989 年 3 月 9 日）中で彼は、記録上最も温暖だった 1 月について冗談以上のことを言おうとして、地球温暖化の長期にわたる影響に関して深刻に話をした。彼の顧客〔銀行家〕たちはすべて、「我々が趣味をたしなむのと同じように、家庭での憩いの時」、しかも週末に、環境に関して考えていると思わせるような反応であった。我々は、その環境のことに関して本当に四六時中「とくに仕事中に」考えるべき時に、である。しかし、国際的銀行家たちが、彼らの時間地平が分単位である時に、そのようなことについて、どうしたら考えることができるというのだろうか？もしも、金融市場において 24 時間がとても長い時間であるならば、そして、もしも、金融資本が、今日、国際的展開において最も強い権力であるならば、環境規制の視点はさておき、まさに長期間にわたる投資計画の視点でいささかでも意味をもつ方面から、我々は、どんな種類の長期間にわたる決定を期待できうるだろうか？ビンセンスの司令官が、スクリーン上のイメージが、急降下する戦闘機かイランのエアバスのどちらなのか、ということに関する生か死かの決定をしなければならなかった時〔1988 年 7 月 3 日にペルシャ湾で起きた、米軍のイージス艦ビンセンスによるイラン航空民間旅客機撃墜事件をさしている；乗客・乗員 290 人全員が死亡し、犠牲者の遺体が海中を漂う映像が世界中に報道された〕、究極的にすべてをはかない断片へと分解する時間－空間の圧縮のテロルに彼はとらわれていた。悪魔のいけにえとなったのは、こうして一番しんがりどころか地球規模での統一性、つまりかつてないほどにより緊密に結びついていて、そこでの変化のペースが突然に加速されてきたような国際化社会の全体的な社会組織だったのである。

地理学者たちはこれらの時間のテロルから逃れることはできない。そして我々は広い意味で、歴史に対する勝利者ではなくむしろ犠牲者になることを避けることもできない。しかし、我々は、たとえ決して我々自身が創りだしたのではない条件のもとであっても、異なる社会的ヴィジョンと異なる未来とを求めながら、利害関係と目標とを意図的に意識しつつ、まちがいなく闘争することができる。我々の地理学を空間と時間の間に位置づけることによって、そして我々自身を空間と時間に関する歴史地理における活動的な参加者とみなすことによって、我々は自身にとっての目的に関するいくらかより明白な感覚を取り戻し、真剣な知的論争と探究からなる闘技場を定義し、そしてそれゆえ、深刻な問題を抱えた世界の中にあって知的にも政治的にも主要な貢献をなすことができる、と私は信じている。

謝辞

私は、〔アメリカ地理学会の〕総会での私のレクチャーと執筆した草稿の双方に関して、建設的なコメントをくれたネィール・スミス Neil Smith に感謝する。私はまた、ジャック・ラントン Jack Langton からも助力となるコメントをもらった。

注

1．この論文は、1989 年 3 月 21 日のメリーランド州ボルティモアで開催された、アメリカ地理学者協会の年次大会で行われた、総会での講演を編集したものである。

参考文献

Baudelaire, C. (1981): *Selected writings on art and artists*. Cambridge, Cambridge University Press.

Bell, D. (1976): *The cultural contradictions of capitalism*. New York, Basic Books. ベル, D.著, 林雄二郎訳（1976）：『資本主義の文化的矛盾（上）（中）』講談社（講談社学術文庫）.

Berman, M. (1982): *All that is solid melts into air*. New York, Simon and Schuster.

Birringer, J. (1989): Invisible cities/trans-cultural images. *Performing*

Arts Journal 12: 33-34, 120-38.

Blitz, M. (1981): *Heidegger's being and time: The possibility of political philosophy*. Ithaca, New York, Cornell University Press.

Bourdieu, P. (1977): *Outline of a theory of practice*. Cambridge, Cambridge University Press.

Chytry, J. (1989): *The aesthetic state: A quest in modern German thought*. Berkeley, University of California Press.

Debord, G. (1983): *Society of the spectacle*. Detroit: Black and Red Books.

Durkheim, E. (1915): *The elementary forms of the religious life*. London, Allen and Unwin. デュルケム, E.著, 古野清人訳 (1975) :『宗教生活の原初形態 (上) (下) 』岩波書店 (岩波文庫) .

Eagleton, T. (1990): *The ideology of the aesthetic*. Oxford, Basil Blackwell.

Forman, F.J. with Sowton, C., eds. (1989): *Taking our time: Feminist perspectives on temporality*. Oxford, Pergamon Press.

Giddens, A. (1984): *The constitution of society*. Oxford, Polity Press.

Gregory, D. and Urry, J. eds. (1985): *Social relations and spatial structures*. London, Mac-millan.

Hall, E.T. (1966): *The hidden dimension*. Garden City, New York, Doubleday. ホール, E. T.著, 日高敏隆・佐藤信行訳 (1970) :『かくれた次元』みすず書房.

Hallowell,, A. (1955): *Culture and experience*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.

Hareven, T. (1982): *Family time and industrial time*. Cambridge, Cambridge University Press.

Harries, K. (1982): Building and the terror of time. *Perspecta: The Yale Architectural Journal* 19: 59-69.

Hartshorne, R. (1939): *The nature of geography*. Lancaster, PA, Association of American Geographers. ハーツホーン, R. 著, 野村正七訳 (1957) :『地理学方法論』朝倉書店.

Harvey, D. (1982): *The limits to capital*. Chicago, University of Chicago Press. ハーヴェイ, D.著, 松石勝彦・水岡不二雄 ほか訳 (1989, 1990) :『空間編成の経済理論 (上) (下) 』大明堂.

Harvey, D. (1985): *Consciousness and the urban experience*. Baltimore, Johns Hopkins University Press.

Harvey, D. (1989a): *The condition of postmodernity*. New York, Basil Blackwell.

Harvey, D. (1989b): From managerialism to entrepreneurialism: The transformation in urban governance in late capitalism. *Geografiska Annaler* 71 (Series B): 3-17. ハーヴェイ, D.著, 廣松 悟訳 (1997) :「都市管理者主義から都市企業家主義へ――後期資本主義における都市統治の変容――」.『空間・社会・地理思想』2 号, pp. 36-53.

Heidegger, M. (1959): *An introduction to metaphysics*. New Haven, CT, Yale University Press. ハイデッガー, M.著,川原栄峰訳 (1994) :『形而上学入門』平凡社.

Helgerson, R. (1986): The land speaks: Cartography, chorography, and subversion in Renaissance England. *Representations* 16: 51-85.

Jameson, F. (1984): Postmodernism, or the cultural logic of late capitalism. *New Left Review* 146: 53-92.

Kern, S. (1983). *The culture of time and space, 1880-1918*. London, Weidenfeld and Nicholson. カーン, S.著, 浅野敏夫訳 (1993) 『時間の文化史－時間と空間の文化：1880－1918 年 (上) 』法政大学出版局. カーン, S.著, 浅野敏夫・久郷丈夫訳 (1993) 『空間の文化史－時間と空間の文化：1880－1918 年 (下) 』法政大学出版局.

Landes, D. (1983): *Revolution in time: Clocks and the making of the modern world*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Lefebvre, H. (1974): *La production de l'espace*. Paris: Anthropos.

Le Goff, J. (1980): *Time, work and culture in the middle ages*. Chicago: University of Chicago Press.

Le Goff, J. (1988): *Medieval civilisation*. Oxford, Basil Blackwell.

Levine, M. (1987): Downtown redevelopment as an urban growth strategy; a critical appraisal of the Baltimore renaissance. *Journal of Urban Affairs* 9(2): 103-23.

Lévi-Strauss, C. (1963): *Structural anthropology*. New York, Random House. レヴィ＝ストロース, C.著, 荒川磯男・生松敬三ほか訳 (1972) :『構造人類学』みすず書房.

Mallory, W.F., and Simpson-Housley, P., eds. (1987): *Geography and literature: A meeting of the disciplines*. Syracuse, NY: Syracuse University Press.

Marx, K. (1967): *Capital, Volume 1*. New York, International Publishers. マルクス, K.著, 向坂逸郎訳 (1969) :『資本論』第 1 分冊～第 3 分冊, 岩波書店 (岩波文庫) .

McLuhan, M. (1966): *Understanding media: The extensions of man*. New York, McGraw-Hill.

Mitchell, T. (1988): *Colonising Egypt*. Cambridge, Cambridge University Press.

Moore, B. (1986): *Space, text and gender*. Cambridge, Cambridge University Press.

Pearce, D., Markandya, A., and Barbier, E. (1989): *Blueprint for a green economy*. London, Earthscan Publications.

Relph, E. (1976). *Place and placelessness*. London, Pion. レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部 隆・石山美也子訳 (1991) :『場所の現象学――没場所性を越えて――』筑摩書房.

Ross, K. (1988): *The emergence of social space: Rimbaud and the Commune*. Minneapolis, University of Minnesota Press.

Sack, R. 1986. *Human territoriality: Its theory and history*. Cambridge, Cambridge University Press.

Said, E. (1978). *Orientalism*. New York, Random House. サイード, E.著, 板垣雄三・杉田英明監訳 (1986) :『オリエンタリズム』平凡社.

Schivelbusch, W. (1978): Railroad space and railroad time. New *German Critique* 14: 31-40. シベルブッシュ, W.著, 加藤二郎訳 (1982) :『鉄道旅行の歴史－十九世紀における空間と時間の工業化』法政大学出版局。

Seamon, D., and Mugerauer, R., eds. (1989): *Dwelling, place and environment*. New York, Columbia University Press.

Smith, N. (1984): *Unevendevelopment: Nature, capital and the production of space*. Oxford, Basil Blackwell.

Soja, E. (1989): *Postmodern geographies*. London, Pluto.

Stone, J. (1988): Imperialism, colonialism and cartography. *Transactions, Institute of British Geographers*. N.S.13, No.1, 57-64.

Szanton, P. (1986): *Baltimore 2000*. Baltimore: Goldseker Foundation.

Toffler, A. (1970): *Future shock*. New York, Bodley Head. トフラー, A.著, 徳山二郎訳 (1982) :『未来の衝撃』中央公論社 (中公文庫) .

Tuan, Yi-Fu. (1977): *Space and place*. Minneapolis, Minnesota University Press. トゥアン, Y-F. 著, 山本 浩訳 (1988) ;『空間の経験——身体から都市へ』 筑摩書房.

解題：ハーヴェイの空間－時間論

堤 研二

デイヴィド・ハーヴェイ（1935－ ）は、これまで常に地理学界のみならず社会科学の世界をリードするような業績を蓄積してきた。彼の研究歴は、第二次世界大戦戦後の、とりわけ 1970 年代以降の人文地理学の歴史を創造し動かしてきた、といっても過言ではない（この点に関して、訳者は、既に他稿を発表しているので(堤、1995)、ここでは詳しくふれない）。

ここで翻訳された本論文も、大部の著作ではないけれども、極めて重大な示唆に満ちた超一級のものである。以下、当該論文について述べていきたいと思う。

ハーヴェイが現在勤務するジョンズ・ホプキンズ大学が立地し、彼自身もそこの住民である、アメリカ東海岸の都市ボルティモア（メリーランド州）において、1989 年 3 月、アメリカ地理学者協会（The Association of American Geographers）の大会が開催された。本論文はその時の総会でのレクチャーをもとに執筆されたものであり、それが後に学会誌に掲載された時、彼は、ジョンズ・ホプキンス大学から異動して、オックスフォード大学のハルフォード・マッキンダー・プロフェッサーの職にあった。現在、彼は再び、古巣のジョンズ・ホプキンス大学に戻っている。

彼がボルティモアにこだわる理由の一つとして、本論文の前半部分にも言及箇所があるが、都市空間での開発と疎外のせめぎ合いが具現化した、いわば彼の研究の「実験空間」としての性格をこの都市が有していることがあげられようが、この点は彼が上記のレクチャーを行ったのと同時期に出版された postmodernity に関する大著（Harvey, 1989）においても言及されている。

さて、この論文の重要なポイントについて、ここで概述してみよう。ハーヴェイは、「空間と時間に関する歴史地理学」を提唱し、「時間－空間の圧縮」をキーワードにして、資本主義の展開における空間形成・空間編成を、時間および空間に与えられた意義と価値をふまえて分析することの重要性を主張した。また、この方向性をとることによって、「地理学的想像力」（ハーヴェイ自身、この言葉を本論文では、論文と章のタイトル、アブストラクトの３カ所で用いているだけであるが）を発揮して、資本主義の arena と科学の arena の双方で地理学が新展開を計ることを教示している。

本論文はもとより、ハーヴェイのこれまでの研究には、様々な弁証法的二重性／二元性が登場してくる。ここで、若干単純化したものも含めて主要なものをあげると、次のような組み合わせが考えられよう。

時間／空間
場所／空間
固定／変動、断片、一時性
上部構造／下部構造
社会文化／政治経済
空間的障壁／資本の回転および様々なフローのスピード・アップ
建造環境／資本流動、フレキシブルな蓄積
社会構造／社会システム

個人／全体社会

これらの一つ一つについて個別的に検討する余裕はないが、ハーヴェイの議論に登場するこれらの様々な二重性／二元性は、資本主義の本質であり、そこに訳者は「錯綜するねじれ関係の複合体」とでも命名するべきような、資本主義のメカニズム特性を看取する。つまり、固定／変動・流動に代表されるような、相反する特性項目が不可分に結びつきながらも、社会諸過程において必ずしもそれらがうまく連動せず、むしろ変化の態様の差異から「ねじれ」の現象を生ずるのである。そして、そこから、様々な矛盾・コンフリクト・階級分派・階級闘争が産み出されてくる。この「ねじれ」の展開には、時間差があるが、その背景構造としてハーヴェイのいう資本の第1次～第3次循環 primary, secondary and tertiary circuits of capital が存在している。この資本循環の回路を通じて、諸矛盾などの再生産も構造化されている／いく。

このように考えた場合、例えば、訳者がこれまで調査し、提示してきた縁辺地域の変動の「ねじれ」現象（「縁辺地域の社会変動のモデル」。経済的地域統合のボーダーレス的な進展と社会・文化的な空間統合の地域的残存との間の、変動の差異に着目する）を説明するロジックを、ハーヴェイは提示しているのであり、これに関する言及が本論文中にも散見された。

本論文ではまた、美学理論と地政学の関係にも言及されており、イメージの場所への固着・場所化を通じた権力の発揮が、個々人の思想から国家的全体思想にもつながる可能性を示唆しているところ（多少フーコー流であるが）、そして、その可能性を認めた上で、我々が政治的にも「エージェント」でなければならない旨、主張するところなど、ハーヴェイの構想の遡及力・統合力には圧倒されてしまうところがある。

以前にも指摘したが、ハーヴェイの空間編成に関わる理論展開の基本的な兆候は、既に 1973 年の『*Social justice and the city*』で提示されていた（堤、1995、pp.17-18）。すなわち、

①それぞれの歴史性を有した様々な地域ごとに見られる社会変換（社会内部の変換法則）の重要性

②上部構造の重要性

③社会システムと社会構造の二重性

の三つである。計量地理学者を経てマルクス主義経済地理学への道を歩み出した彼が、およそ四半世紀前の三十歳代後半の時期に描いた彼の研究方向のカタログの中に、既に今日の地理学のみならず他の社会科学にも多大な影響を与えている彼の理論的フレームワークの前身的な理論構成が顕れていたのである。それ以降の彼は、資本主義の展開と空間-時間を自身のマルクス解釈を軸に分析してきた、と言われているが、その先見性には繰り返し驚かざるを得ない。

【あとがき】

ハーヴェイの文章とその内容は、英語圏の地理学者にとってみても比較的難解である、と言われている。今回翻訳した論文は、一度は口頭で発表されていたものを書き下ろしたものであるが、その分、一方で表現の口語的色彩が強かったが、他方、会話文的な表現やレトリック、語句の省略、などが極めて多く、文意をくみ取るのに時間を要した箇所が少なくなかった。そのために、翻訳にあたって、補足的な訳注を〔　〕内に頻繁に記さざるを得なかった。訳注をあえて本文に挿入する形をとったのは、この翻訳が、学部学生にも親しめるような、基本的なリーディングスといった性格を持つ翻訳集に収録されることを念頭に置いたためである。

なお、以下にハーヴェイ自身の著作と、彼の業績に論及している他者の著作の一覧を付した。まだ不完全なものであるが、とりあえずは、便宜に供したい。

【付　記】

1996 年の夏にハーヴェイ教授は心臓の外科的手術を受けられた。かつて“restless analyst”と評された彼の、一刻も早い快復を祈念したい。

ハーヴェイ著作一覧

●Harvey,D.(1963) "Locational change in the Kentish hop industry and the analysis of land use patterns," *Transactions and Papers, Institute of British Geographers* 33, pp.123-144.

●Harvey,D.(1966a) "Theoretical concepts and the analysis of land use patterns," *Annals of the Association of American Geographers* 56-2, pp.361-374.

●Harvey,D.(1966b) "Geographical processes and the analysis of point patterns: testing models of diffusion by quadrat sampling," *Transactions of the Institute of British Geographers* 40, pp.81-95.

●Harvey,D.(1967a) "Models of the evolution of spatial patterns in human geography," in Chorley, R.J. & Hagget, P.(eds.) '*Models in geography*,' pp. 549-608, Methuen (London).

●Harvey,D.(1967b) "Behavioral postulates and the construction of theory in human geography," *Semin. Pap., Ser. A. No.6, Dept. of Geog., Univ. of Bristol*, 29pp.転載:1970, *Geographia Polonica* 18, pp.27-45. 転載分の邦訳:梶川勇作 訳 (1976) 「人文地理学における行動公準と理論の構築」、野間三郎 訳編『空間の理論:地理科学のフロンティア』、73-94 頁、古今書院 (訳者解題「一般システム理論と地理学」、69-72 頁)。

●Harvey,D.(1967c) "Editorial introduction: the problem of theory construction in geography," *Journal of Regional Science* 7-2, pp.211-216.

●Harvey,D.(1968a) "Some methodological problems in the use of the Neyman Type A and negative binominal probability distributions for the analysis of spatial point patterns," *Transactions of the Institute of British Geographers* 44, pp.85-95.

●Harvey,D.(1968b) "Pattern, process, and the scale problem in geographical research," *Transactions of the Institute of British Geographers* 45, pp.71-78.

●Harvey,D.(1969a) "*Explanation in geography*," Edward Arnold (London). 邦訳:松本正美 抄訳 (1979) 『地理学基礎論』、古今書院。

●Harvey,D.(1969b) "Review of A.Pred, 'Behavior and location part I'," *Geographical Review* 59, pp.312-314.

●Harvey,D.(1969c) "Conceptual and measurement problems in the cognitive-behavioral approach to location theory," in Cox, K.R. & Golledge, R.G.(eds.) 'Behavioral problems in geography: a symposium,' *Northwestern University Studies in Geography* 17, pp.35-67. Cf 1981b.

●Harvey,D.(1970) "Social process and spatial form: an analysis of the conceptual problems of urban planning," *Papers Proc. of the Regional Science Association* 25, pp.47-69. (also in Jones, E.(ed.)(1975) '*Readings in social geography*,' pp.288-306, Oxford Univ.Prs.) Cf.1973, Ch.1.

● Harvey,D.(1971) "Social processes, spatial form and the redistribution of real income in an urban system," in Chisholm, M.(ed.) '*Regional forecasting*' pp.267-300, Butterworth (London). Cf.1973, Ch.2.

●Harvey,D.(1972a)"Revolutionary and counter revolutionary theory in geography and the problem of ghetto formation," *Antipode* 4-2, pp.1-13. (also in Rose, H.(ed.) '*Geography of the ghetto*,' pp.1-25, Northern Illinois Univ. Prs (Dekalb, Illinois)) Cf.1973, Ch.4.

●Harvey, D.(1972b) "Society, the city and the space economy of urbanism," *AAG Resource Paper*, A.A.G. (Washington D.C.).

●Harvey,D.(1973) "*Social justice and the city*," Johns Hopkins Univ.Prs.(Baltimore)(英国版;Edward Arnold, London). 邦訳:竹内啓一・松本正美 訳 (1980) 『都市と社会的不平等』、日本ブリタニカ、総 438 頁。

●Harvey,D.(1974a) "A commentary on the comments," *Antipode* 6, pp.36-41.

●Harvey,D.(1974b) "Discussion(with Brian Berry)," *Antipode* 6-2, pp.145-148.

●Harvey,D.(1974c) "What kind of geography for what kind of public policy ?," *Transactions of the Institute of British Geographers* 63, pp.18-24.

●Harvey,D.(1974d) "Population, resources, and the ideology of science," *Economic Geography* 50-3, pp.256-277. (also in Peet, R.(ed.)(1977) '*Radical geography: alternative viewpoints on contemporary social issues*,' pp.213-242 (Environment, resources and people の章をこの論文 1 編で構成), Methuen.)

●Harvey,D.(1974e) "Class-monopoly rent, finance capital and the urban revolution," *Regional Studies* 8, pp.239-255. Cf.1985a. (『都市の資本論』(1991)) の第 3 章「階級独占地代、金融資本、および都市革命」。

●Harvey,D.(1975a) "Class structure in a capitalist society and the theory of residential differentiation," in Peel, R.,Chisholm, M. & Hagget, P.(eds.) '*Processes in physical and human geography: Bristol essays in geography*,' pp.354-369 (ch.17), Heinemann (London). Cf.1985a. (『都市の資本論』(1991)) の第 5 章「階級構造と居住分化の理論」。Cf.1989a, Ch.4.:Class structure and the theory of residential Differentiation、pp.109-124.

●Harvey,D.(1975b) "The political economy of urbanization in the advanced capitalist societies: the case of United States," in Geppert, G. & Rose, H.(eds.) "*The social economy of cities (Annual Review of Urban Affairs*, Annals 9)," pp.119-163, Sage (Beverly Hills, Calif.).

● Harvey,D.(1975c) "Review of B.J.L.Berry, 'The human consequences of urbanization', *Annals of the Association of*

American Geographers 65, pp.99-103.

●Harvey,D.(1975d) "The geography of capitalist accumulation: a reconstruction of the Marxian theory," *Antipode* 7-2, pp.9-21. (also in Peet, R.(ed.)(1977) '*Radical geography: alternative viewpoints on contemporary social issues,*' pp.263-292(Imperialism and geopolitics の章を構成する２論文のうちの１つ), Methuen.) Cf.1985a.（『都市の資本論』(1991)）の第２章「資本主義的蓄積の地理学：マルクス主義理論の再構築にむけて」（1981a とともに）。

●Harvey,D.(1976a) "The marxian theory of the state," *Antipode* 8-2, pp.80-89.

●Harvey,D.(1976b) "Labor, capital and class struggle around the built environment in advanced capitalist societies," *Politics and Society* 6-3, pp.265-295. (also in Cox, K. (ed.) (1978) '*Urbanization and conflict in market societies,*' pp.9-37, Chicago, Maaroufa（または Methuen, London）.) Cf.1985c, Ch.2,pp.36-62. 邦訳：水岡不二雄訳（1996）「先進資本主義社会の建造環境をめぐる労働、資本、および階級闘争」、日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会－空間研究の地平：人文地理学のネオ古典を読む』、大阪市立大学文学部地理学教室、12-31 頁。

●Harvey,D.(1977) "Government policies, financial institutions and neighbourhood change in United States cities,"in Deskins, Jr., D.R., Kish, E., Nystuen, J.D. & Olsson, G.(eds.) '*Geographical humanism, analysis and social action,*' (Michigan Geographical Publication 17), pp.291-320, Univ. Michigan, Ann Arbor.

●Harvey,D.(1978a) "Environment construit et création de l'espace dans la société capitaliste," *L'espace Géographique* 4, pp.300-301.

● Harvey,D.(1978b) " The urban process under capitalism: a framework for analysis," *International Journal of Urban and Regional Research* 2, pp.101-131. Cf.1981c. Cf.1985a（『都市の資本論』(1991)）の第１章「資本主義のもとでの都市過程：分析の枠組み」(1989a)、第２章 pp.59-89。

●Harvey,D.(1978c) "On planning the ideology of planning," in Burchall,J.(ed.) '*Planning theory in the 1980's: a search for future directions*' pp.213-233, The Center for Urban Policy Research, Rutgers Univ.Prs. Cf.1985a（『都市の資本論』(1991)）第７章「プランニングのイデオロギーのプランニング」。

●Harvey,D.(1979)"Monument and myth," *Annals of the Association of American Geographers* 69-3, pp.362-381. 邦訳：佐藤[堂園]いつみ、太田雅子 共訳（1981）「モニュメントと神話」、千田稔 訳編『地図のかなたに』、地人書房、225-266 頁（第６章）（千田の解説が付加：268-272 頁）。 Cf.1985c, Ch.4, pp.221-249.（副題：The Building of the Basilica of the Sacred Heart） Cf.1989a, Ch.7, pp.200-228.（副題：The Building of the Basilica of the Sacred Heart）

●Harvey,D.(1981a) "The spatial fix: Hegel, von Thunen, and Marx," *Antipode* 13-3, pp.1-12. Cf.1985a（『都市の資本論』(1991)）の第２章「資本主義的蓄積の地理学：マルクス主義理論の再構築にむけて」（1975d とともに）。

●Harvey,D.(1981b) "Conceptual and measurement problems in the cognitive-behavioral approach to location theory," in Cox, K.R. & Golledge, R.G.(eds.) '*Behavioral problems in geography revisited,*' pp.37-65. 邦訳：奥村玲子 訳「立地論へ認知・行動論的アプローチを適用するさいの概念と測度の問題」、寺阪昭信 監訳（1986）『空間と行動論：地理学における行動論の諸問題』、37-65 頁（第２章）、地人書房。 Cf.1969c.

●Harvey,D.(1981c) "The urban process under capitalism," in Dear, M. & Scott, A.(eds.) '*Urbanization and urban planning in capitalist society,*' pp.91-121, Methuen (London). Cf.1978b.

●Harvey,D.(1982a) "*The limits to capital,*" Basil Blackwell (Oxford)（アメリカ版は Chicago Univ.Prs.）. 邦訳：松石勝彦・水岡不二雄ほか訳（1989･90）『空間編成の経済理論 (上)(下)』、大明堂。

●Harvey,D.(1982b) "Land rent and the transition to the capitalist mode of production," *Antipode* 14-3, pp.17-25. Cf.1985a（『都市の資本論』(1991)）第４章「資本主義のもとでの地代」。 Cf. 1989a, Ch.3, pp.90-108.

● Harvey,D.(1984) " On the history and present condition of geography: an historical materialist manifesto," *The Professional Geographer* 36-1, pp.1-11.

●Harvey,D.(1985a) "*The urbanization of capital (: studies in the history of capitalist urbanization* の 1/2)," Johns Hopkins Univ.Prs.（英国版は Basil Blackwell(Oxford)）. 邦訳：水岡不二雄 監訳（1991）『都市の資本論』、青木書店。

●Harvey,D.(1985b) "The geopolitics of capitalism," in Gregory, D. & Urry, J.(eds.) "*Social relations and spatial structures,*" pp.128-163, Macmillan, P.440+x.

●Harvey,D.(1985c) "*Consciousness and the urban experience(: studies in the history of capitalist urbanization* の 1/2)," Johns Hopkins Univ.Prs. (英国版は Basil Blackwell (Oxford)). Cf. Ch.5: The Urbanization of Consciousness, pp.250-276 は 1989a, Ch.8, pp.229-255 におなじ。 一部邦訳：『地図のかなたに』、ならびに、日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会-空間研究の地平：人文地理学のネオ古典を読む』に所収。 Cf.1979.

● Harvey,D.(1987a) " The representation of urban life (review article): T.J.Clark, '*The painting of modern life: Paris in the art of Manet and hisfollowers*' (London: Thamas and Hudson, 1985.)," *Journal of Historical Geography* 13-3, pp.317-321.

●Harvey,D.(1987b) "Flexible accumulation through urbanization: reflections on 'postmodernism' in the American city," *Antipode* 19-3, pp.260-286. (also '*Paper to The Sixth Urban Change and Conflict Conference, Univ. of Kent, Canterbury, Sept.*'). 邦訳：加藤政洋訳「都市空間形成を通じてのフレキシブルな蓄積――アメリカ都市における「ポスト・モダニズム」に関する省察――」『空間・社会・地理思想』２号、1997 年、大阪市立大学、19-34 頁。

●Harvey,D.(1987c) "Three myths in search of a reality in urban studies," *Environment and Planning D: Society and space* 5, pp.

367-376.

●Harvey,D.(1988) "The geographical and geopolitical consequences of the translation from Fordist to flexible accumulation," in Sternlieb, G. & Hughs, J.W.(eds.) "*America's new market geography: nation, region and metropolis*," pp.101-134(ch.3), The Center for Urban policy Research, The State Univ. of New Jersey.

●Harvey,D.(1989a) "*The urban experience*," Basil Blackwell (Oxford), P.293. Cf.Ch.8:bThe Urbanization of Consciousness, pp. 229-255 は、1989a, Ch.5,pp.250-276 におなじ。

●Harvey,D.(1989b) "*The condition of postmodernity: an enquiry into the origins of cultural change*," Basil Blackwell (Oxford).

●Harvey,D.(1989c) "From models to Marx: notes on the project to 'remodel' contemporary geography," in Macmillan, B.(ed.) '*Remodelling geography*.', pp.211-216, Basil Blackwell (Oxford).

Harvey,D.(1989d) "From managerialism to entrepreneurialism: the transformation in urban governance in late capitalism," *Geografiska Annaler* 71B-1, pp.3-17. 邦訳：廣松 悟訳「都市管理者主義から都市企業家主義へ——後期資本主義における都市統治の変容——」『空間・社会・地理思想』2号、1997 年、大阪市立大学、35-53 頁。

●Harvey,D.(1990) "Between space and time: reflection on the geographical imagination," *Annals of the Association of American Geographers* 80-3, pp.418-434. 邦訳：堤 研二訳「空間と時間の間で——地理学的想像力に関する省察——」『空間・社会・地理思想』2号、1997 年、大阪市立大学、54-73 頁。

●Harvey,D.(1991a) "Flexibility: threat or opportunity ?," *Socialist Review* 21-1, pp.65-77.

●Harvey,D.(1991b) "Afterword," in Lefebvre, H. '*The production of space*,' pp.425-434, Basil Blackwell, P.454+ix.

●Harvey,D.(1992a) "Postmodern morality plays," *Antipode* 24-4, pp.300-326.

●Harvey,D.(1992b) "Social justice, postmodernism and the city," *International Journal of Urban and Regional Research* 16-4, pp.588-601.

●Harvey,D.(1993a) "From space to place and back again: reflections on the condition of postmodernity,," in Bird, J., Curtis, B., Putnam, T., Robertson, G. and Tickner, L.(eds.) '*Mapping the futures: local cultures, global change*,' pp.3-29(ch.1), Routledge, P.286+xv. 邦訳：中島弘二訳「空間から場所へ、そして再び——ポストモダニティの条件に関する省察——」『空間・社会・地理思想』2号、1997 年、大阪市立大学、79-97 頁。

●Harvey,D.(1993b) "Class relations, social justice and the politics of difference," in Keith, M. & Pile, S.(eds.) '*Place and politics of identity*,' pp.41-66, Routledge.

●Harvey,D.(1996) '*Justice, nature and the geography of difference*', Blackwell.

●Harvey,D. & Chatterjee, L.(1974) "Absolute rent and the structuring of space by financial institutions," *Antipode* 6-1, pp.22-36.

●Harvey,D. & Scott, A.(1989) "The practice of human geography: theory and empirical specificity in the transition from Fordism to flexible accumulation," in Macmillan, B.(ed.) '*Remodelling geography*.', pp.217-229, Basil Blackwell(Oxford).

●Harvey,D. & Smith, N.(1984) "From capitals to capital," *The Left Academy:Marxist Scholarship on American Campuses*, 2 (ed. by Ollman, B. & Vernoff,E., Praeger(N.Y.)), pp.99-121(ch.5).

●Hayter,T. & Harvey,D.(eds.)(1993) "*The factory and the city: The story of the Cowley Automobile workers in Oxford*," Mansell.

他者によるハーヴェイ関連の文献

●岩永真治（1993）「デイヴィッド・ハーヴェイと現代都市：『差異』と『共通性』の内的弁証法をもとめて」、吉原直樹 編『都市の思想：空間論の再構成にむけて』、青木書店、247-273 頁。

●小野塚佳光（1989・90）「資本と労働力の地理的再編成」(1)(2)、愛媛経済論集 9-2 ・ 33-54 頁、10-1 ・ 1 13-137 頁。

●高津斌彰・水内俊雄・實清隆・水岡不二雄・堤研二（ファースト・オーサーは水岡不二雄）（1995）「空間編成論と日本の社会・経済地理学：D. ハーヴェイの理論を中心に」（1994 年度秋季学術大会シンポジウム）、地理学評論 68A-3、180-190 頁。

●竹内啓一（1984）「デイヴィッド・ハーヴェイの地理学」、一橋論叢 92-2（通巻 526）、40-57 頁。

●堤研二（1995）「戦後の人文地理学とデイヴィッド・ハーヴェイ」、島根地理学会誌 31、11-30 頁。

●中村剛治郎（1990）「地域経済学の潮流」、宮本憲一・横田茂・中村剛治郎 編『地域経済学』、有斐閣、141-194 頁。

●西山志保（1997）「東京の都市空間と地域社会の変容：カステルとハーヴェイの理論から」、人文地理 49-1、64-75 頁。

●平井規之（1989）「David Harvey, The Limits to Capital(1982) について」、経済研究（一橋大学）40-1、65-68 頁。

●水岡不二雄（1994）「ディヴィド・ハーヴェイ：地理学に空間の理論と社会の科学を求めて」（特別連載「二〇世紀の地理学者たち」第 4 回）、地理 29-9、8

●Clark, Gordon C.（1983）"The Limits to Capital. David Harvey" (Book Review), *Annals of the Association of American*

Geographers 73-3, pp.447-449.

●Gregory, D. (1994) 'May 68 and Harvey 69,' in "*Geographical imaginations*," Blackwell, pp.349-354. (xii+P.442).

●Hamilton, F.E.Ian (1984) "The Limits to Capital. By David Harvey" (Book Review), *Economic Geography* 60-1, pp.85-86.

●Paterson, John L.(1984) "*David Harvey's geography*," Croom Helm.

●Peake, L. and Jackson, P.(1988) " 'The restless analyst' :an interview with David Harvey," *Journal of Geography in Higher Education* 12-1, pp.5-20.

●Wolff, Richard D. (1984) "The Limits to Capital. By David Harvey" (Book Review), *Economic Geography* 60-1, pp.81-85.